

東京立正女子短期大学紀要

第 7 卷

目 次

英語教育における Punctuation の用法について (2).....井 口 美 登 利 (1)	
Pidgin English ——その発生と特徴——杉 本 豊 久 (20)	
<i>Of Mice and Men</i> について (主人公ジョージとレニーの意味するもの).....深 沢 俊 雄 (38)	
<i>Pantaloons in Black</i> について —— <i>Go Down, Moses</i> 論——.....佐 藤 秀 一 (45)	
ロレンスと黙示録 あるいは自然の両義性.....山 田 田 津 子 (76)	
隠れキリシタンにおける穢れの観念について.....紙 谷 威 広 (96)	

1979

東京立正女子短期大学

英語教育における Punctuation の用法について -2-

井 口 美登利

- 0 はじめに } 以上前稿「英語教育における Punctuation の用法に
- 1 Punctuation の歴史 } ついて—1—」東京立正女子短期大学紀要 第六巻・
昭和53年3月, pp. 1—15.
- 2 Punctuation の種類とその用法
 - G.P.O. Style Manual
 - Gregg Reference Manual
- 3 英語教育と Punctuation
 - Practical English Handbook
 - Typing Mailable Letters
 - New Horizon English Course
 - New Prince English Course
 - Everyday English
- 4 おわりに

2 Punctuation の種類とその用法

2—1 現代の英語表記に用いられている Punctuation の用法が17世紀以後に確立されたこと；基本的な Punctuation Marks としては Period, Colon, Semicolon, および Comma があり, 補助的なものとして Question Mark, Exclamation Point, Quotation Marks, さらには Hyphen, Apostrophe, Dash, Parentheses 等が挙げられることは, 前稿の終りに示した通りである。

今日, 一般に受容されている Punctuation の用法については, 各種の, いわゆる Style Manual によって多少の異同はあるにしても, その大筋においては一応の安定を見せているようである。もとより, 詩作をはじめとする, 文芸の分野, あるいは専門の文献の領域にあっては, 時に大いに個

性的な用法のあることは当然であり、文体との関係においてもまた、高度に Formal なもの、あるいはその逆に、まったく Colloquial な表現といったように、一般的な Punctuation の用法から考えれば逸脱している Case も少しとしないことは事実である。

けれども、これが各人の恣意的なものとなつては、徒らに混乱を招くことは明らかである。そこには根底となる基準がなければならぬ。すなわち、原則があつての変則であり、本格をふまえての破格であるべきであると思う。

2—2 いわゆる G.P.O. Manual, 正確に言えば United States Government Printing Office Style Manual¹ はその第9章を専ら Punctuation の用法にあて², 15頁にわたり、詳細な説明と豊富な用例とを示している。

まず Punctuation を定義して：「書写あるいは印刷された言語の意味を明瞭にするための装置 (Device) である」とした後に、「語順の配置が適切ならば Punctuation の使用は最少限に止まる」こと、そして、「こうした Punctuation の使用を制限する傾向からは、両義・多義をふくむ曖昧さを除き、正確な解釈を可能とする語法 (Phrasing) に熟達することが要求される、」と述べている。

さらに「この Manual は Text³ の扱いにおける通例を示すに止まる。」と記し、次いで Punctuation の用法に対する細目の厳密な規定や画一化には、困難な事情のあることを容認した上で、「一たん選択した用法は、首尾一貫すべきであり、また、文章構造に基づくべきものである。」と冒頭の解説を結んでいる。

2—3 G.P.O. Manual に掲げてある Punctuation の種類は次の通りである。

-
1. United States Government Printing Office Style Board, Revised Edition, January 1959, Washington.
 2. Ibid., pp. 133—148.
 3. 例えば Letter における Text とは Letter body のことをいうのであり、Date, Inside address, Salutation, Closing, Signature section 等の各部については、別の Punctuation form が適用されることを意味している。

Apostrophe	Exclamation point
Brace	Hyphen
Brackets	Parentheses
Colon	Period
Comma	Question mark
Dash	Quotation marks
Ellipsis	Semicolon

これに対する解説は Rule 9. 1. より発して Rule 9. 131. に及ぶ 131 の項目に別れており、解説の補助として引用された文例あるいは句例はその総数 332 に達している。しかもこれが、「単なる通例」というのであるから Punctuation 用法の複雑さは推して知るべきであり、その正確な知識と応用には体系的な教育の必要なことを認識させられるのである。

2—4 民間企業を含む一般の Office での文書作成のための実用的な Manual として、今日もっとも普及度の高い Gregg の Reference Manual⁴ には、その第 1 部、文法・用法・文体の第 1・第 2 章の全部、合計 58 頁を通じて Punctuation の用法と解説に当てている、この書は、巻末の索引を含み総頁数 286 であるから、その 20 per cent 強を占めることになる。この Manual の構成はおおよそ英語を母国語とする人たちにとっての、「文法」の問題とは、Punctuation をはじめとする Capitalization, Numbers, Abbreviations, Plurals and Possessives・・・といった事項が、すくなくとも実用面においては、提起されることを如実に示している。われわれ日本人が会話を交わし文章を書くときに、いちいち「カ行変格活用」の連用形だから・・・という思考過程を経ることがないのと同様に、「不完全自動詞の補語」だの「接続法過去完了」だのといった意識が、実際に日常語としての英語を読み、書く場合に、生じているわけではなからう。けれども、例えば、好むと好まざるとに拘らずわが国でようやく定着した「現代かなづかい」にしても、表音通りを原則としながらも「かなづかい」とは書かぬし、そこには「ぢ」「づ」と「じ」「ず」について、「二語の連合、同音の連呼」による場合の例外規定があるために、いれちえ（入れ知恵）とな

4. Gavin, Ruth E.: Reference Manual for Stenographers and Typists, Third Edition, 1961. ここでは Third Edition によったが、現在は Fifth Edition, 1977 が出ている。

り、つづく（続く）と書くことになる。助詞、長音、拗音あるいは外来語の書き表し方となってくると、これはもう直観で処理して過誤なしというわけには行かない。先に述べたような意味からすればこれが、われわれ日本人にとっての文法の問題といってよからう。

Gregg の Manual に掲げてある Punctuation の種類は：

Major Marks として、	
Terminal Punctuation	{ Period Question mark Exclamation point
Internal Punctuation	{ Comma Semicolon Colon
Other Marks として、	Dash Parentheses Quotation marks Underscore Apostrophe Ellipsis marks Asterisk Diagonal Brackets

の合計15であるが、さらに、もうひとつの要素として Typewriter Spacing with Punctuation Marks を挙げているのは、Word 間の Spacing がむしろ Punctuation に先行していたという歴史的発展の事実を考えるならば興味深い。

Punctuation Marks に対する定義は：「文の意味を容易に理解させるための補助的手段 (Mechanical Means) であり、語順のみで不十分な場合に語・節・相互の適正な関係を表示するものである。」としており、さらにもし、どうしても適当な Punctuation が見当らぬような場合には、そもそも文章構成が不備なのだから、そちらの方を先に訂正すべしといったきわめて実際の助言をそえている。Manual に示されている Rule の数は101から298に至る198の項目に上るが、さらにその中には、a, b, c... といった Sub division あるいは Note, Caution, Exception の示されているも

のも多く、それらをすべて1項目として List up するならば、88項目を加えて総計 286 項目の Rule が存在することになる。そのすべてを完全にそろえることは至難の業であろう。さればこそ、こうした細目に分類し、いちいちの Case に対応した正確な用法の検出できるような Manual の存在理由があるわけである。

3 英語教育と Punctuation

3-1 このように多様化・複雑化した Punctuation Marks に対する充分なる基礎知識を授け、その実際の応用に対する能力を養成するためには、英語教育において如何なる方法が取られ、特に Writing という最大の柱の中においてどのように位置づけられているであろうか？そして、適正な Punctuation 使用の能力こそはまさに、「役に立つ」文書を作成するための不可欠の要素のひとつであることは明らかである。それは主として、広義に Social な Written Communication の場において、もっとも有力に作用する因子となることは勿論であるが、Personal なあるいは Informal な Written Communication にあっても相当の影響を持つべきこともまた疑いない。

3-2 前章で挙げた G.P.O. Manual にしても Gregg Reference Manual にしても、これを文書実務、英語表現法のための教育用 Text として使用することもあるいは可能であろう。しかしながら、その本来の趣旨としては、どこまでも実務のための便覧であり、すでに一応の知識と技能を備えた人たちが座右において活用するためのものであるから、そのままにこれを英語教育に組み入れるのには多少の無理がある、むしろ Review あるいは Summary として、習得した知識を整理させるまとめとしての役割、または Case Study としての応用問題集と考えると活用する方が本筋であろう。

3-3 欧米の College でひろく Text として使用されている各種の English Handbook の類は、Punctuation を含む、こうした基礎的な「文法」の問題を初期の一般教育過程において履修させるためのものと聞いている。

試みにこうした Handbook のひとつである Houghton Mifflin 版の

Practical English Handbook⁵ について見るならば、その Part Four に Punctuation があり、Page 90 の Chapter 21 の End Punctuation から はじまり Page 137 の Chapter 29 の Quotation Marks に至るまでの 9 章、50項目について、合計 138 頁にわたり詳細な解説と豊富な用例、これに加えて適切な練習問題までが、きわめて体系的に、そして何よりも学習に容易なように整然と編集されていることが判明する。⁶ こうした徹底した基礎教育の上に立てこそ、Manual の活用も可能となるはずであるが、母国語たる英語の Punctuation に対して、これだけの教育を必要とすることを再確認するとともに、ひるがえって、わが国の英語教育における Punctuation の用法に関する教育の現状を思うとき、まったく寒心にたえなかったのである。

Practical English Handbook に見える Punctuation 教育の Program の一部を掲げれば次のとおりであって、わが国における英語教育においても、少くとも高等学校の課程中に、この程度の内容を Cover することが望ましいと考える。

1 End Punctuation の種類

Declarative sentence の終りには Period(.)

Interrogative sentence の終りには Question Mark(?)

Exclamatory sentence の終りには Exclamation Point(!)

5. Watkins, Floyd C.; Martin, Edwin T.; and Dillingham, William B.: Practical English Handbook, Second Edition, 1965.

6. この他、すくなくとも筆者が手にした十指に近い Handbook についても、ほとんど同様な内容であって、甲乙は附け難かったが、そのうちの数書を挙げれば次の通りである：

Modern English Handbook, Prentice-Hall, Inc.

(Section 25, pp. 467~496 を Punctuation に当てている.)

Harbrace College Handbook, Harcourt, Brace & World, Inc.

(pp. 109~166 を Punctuation に当てている.)

Concise English Handbook, Wordsworth Publishing Company, Inc.

(pp. 245~289 を Punctuation に当てている.)

The Secretary at Work, McGraw-Hill Book Company, Inc.

(Reference Section, pp. 173~177 を Punctuation に当てている.)

Clerical Office Practice, South-Western Publishing Company

(Appendix B, pp. 502~513 を Punctuation に当てている.)

をおく。

- 1 a Statement あるいは Wish, Command を表わす Sentence の終りには Period を使う。
- 1 b ほとんどの Abbreviation のあとに Period をおく。
- 1 c 書名、題名等のあとには Period をおかない。ただし Question Mark と Exclamation Point はそれが題名の一部であるときは加える。
- 1 d Interrogative Sentence, すなわち, Direct Question の終りには Question Mark を使う。Single Interrogative Sentence の中に、いくつかの Question が含まれている場合には Internal Punctuation としても, Comma の代わりに Question Mark を使うことがある。
- 1 e 年代、日付、数字などが疑わしい場合には Parentheses に包んだ Question Mark をそえることがある。
- 1 f Word, Phrase, Sentence の後に加えた Exclamation Point は Strong Exclamatory Feeling を示す。
Exclamation Point と Comma を連続して使うことはない。
- 1 g 原則として 2 つ以上の Punctuation Mark を連続して使うことはない。

2 The Comma

Comma は Sentence の中で Sentence の構造を示し、意味を明らかにするために使用する。主として、(1) Independent Clauses や Series の中の Items のような Equal Elements を分けるため (2) Modifiers あるいは Parenthetical な Words, Phrases, Clauses を Set off する場合である。Sentence の中で Set off された Element は、その前後に Comma を加える。

- 2 a Coordinating な Conjunction でつながれた Independent Clauses を分けるために Comma をおく。
- 2 b Series, すなわち、3 つ以上の同様な Items は、それが Word, Phrase, Clause のいずれであっても、その間に Comma をおく。
- 2 c And の入っていない Coordinate Adjectives の間にはおかない。

- 2d 通常 Long Introductory Subordinate Phrase or Clause は Comma で Set off する。
- 2e Nonrestrictive な Appositives, Phrase, Clauses は Comma で Set off する。これに反して, Restrictive な Appositives, Phrases, Clausesには Comma を用いない。
- 2f Sentence Modifiers, Conjunctive Adverbs, および Normal Word Order から外れた Sentence Element は Comma で Set off する。ただし Conjunctive Adverb “however” は常に Comma で Set off するが No Matter How を意味する Adverb “however” には Comma は不要である。
- 2g Degrees, Titles および Dates, Places, Addresses の中の Element は Comma で Set off する。
- 2h Contrast を示し, Emphasis を加えるとき, および, 文末の Short Interrogative Element を Set off するのに Comma を使う。
- 2i Yes や No あるいは Oh や Well のあとに Comma を使い Mild Interjection を表わす。
- 2j Direct Address の Words を Set off するとき, Personal Letter における Salutation の後に Comma を使う。
- 2k 引用をともなう he said, he remarked, he replied, のような Expression は Comma で Set off する。
- 2l Absolute Phrase は Comma で Set off する。
- 2m Misreading を防ぐため, あるいは (動詞, 特に be 動詞) の省略を示すために Comma を用いる。
- 3 Unnecessary Commas
- 3a Subject と Verb の間, Verb あるいは Verbal とその Complement の間, Adjective とその Modify する Word の間には Comma は用いない。⁷ ただしそれらの間に Set off すべき Intervening

7. このところが, 日本語における読点(、)の用法と英語における Comma の用法とが基本的にながう点である。日本語では文の主題となる語のあと, すなわち主語のあとに, 原則として読点を加えるのであり, その例として, 永野賢氏は

ゾウは、鼻が長い。ことしの遠足は、城山と決まりました。野球なんか、つ

Elements が入る場合は別である。

- 3b Compound Subjects, Verbs, Complements, or Predicates の間には Contrast or Emphasis を示すとき以外には Comma を用いない。
- 3c ふたつの Dependent Clause を結んでいる Coordinating Conjunction の前には Contrast or Emphasis を示すとき以外 Comma を用いない。
- 3d 比較を表わす than の前, as...as, so...as, so...that のような Compound Conjunction の間には Comma を用いない。
- 3e like, such as およびこれに類した表現のあとには Comma を用いない。ただし, 例えば such as の前にくる Phrase のあとに Nonrestrictive な用法の場合に限り Comma を加える。
- 3f Question Mark, Exclamation Point あるいは Dash と Comma を併用することはない。
- 3g Comma は Parenthesis のあとには使えるが, 前には使わない。
- 3h Short Introductory Adverbial Clauses or Phrases のあとには通常 Comma は不要である。
- 3i Restrictive な Clauses, Phrases, Appositives を Set off するとき Comma を使ってはならぬ。
- 3j Coordinate でない Adjectives のあとに Comma は使わない。

まらないよ。君、知ってるだろう。わたし、存じませんの。を挙げており；主題のあとに読点をうたなくてもよいのは主語・述語の関係にある語句が短いばあいに限られ、その例として：情勢は一変した。を示している。（永野賢、「句とう点のうち方」『言語生活』第66号，昭和32年3月 p. 63）

8. Semicolon は、わが国の学生諸君が「英作文」をやるときに、まずもって使用することの稀な Punctuation であろう。そして、英語を母国語とする人たちによって書かれた多くの文書には、それが Business Letter であろうと、Report, Thesis, であろうと、すくなくともちゃんとした「おとな」の書いたものであるならば、その中に用いられる Punctuation としての Semicolon の使用頻度は決して少くないのである。「文章構造を反映し、文意を明瞭にする」という Punctuation 本来の目的に照らして、こうした Semicolon の活用により、いたずらに Wordy な Sentence は More economical になるばかりか Clearer で More consistent な Expression となってくるのである。後に述べ

4 The Semicolon⁸

Semicolon は Sentence の中で, Coordinate Elements を Comma より強く分けるときに用いる。

- 4a 例え *and, but, or, nor, for, so, yet* のような Coordinate Conjunction で結ばれていない2つの Independent Clause は Semicolon で分ける。
- 4b Independent Clauses を Semicolon で分ければ Emphasis あるいは Strong Contrast を示す。
- 4c 複合構造をもつか、あるいは Internal Punctuation を含む Independent Clause を分けるには Semicolon を用いる。
- 4d Series の中の Internal Punctuation を含む Item を分けるには Semicolon を用いる。
- 4e Independent Clause, Dependent Clause, あるいは Clause, Phrase で Coordinate な関係にない Element の間には Semicolon を用いてはならない。

以下

5 The Colon 5a～5e

6 The Dash 6a～6d

7 Parentheses

8 Brackets

9 Quotation Marks 9a～9f 順となっており、さらに General

るが、わが国の中学校用英語教科書にどの著書／出版社のものにして筆者の知る限りではついに Semicolon は登場していないことを申しそえておく。

日本語の句読点では、Semicolon の役割りのひとつも、いわば Comma と同じ記号の読点で兼用しており、大きく言えば論理的な混乱を避けがたいのではないかと思われる。これも永野賢氏によれば句読点の用法として：

二、役わりの同じ語句が並ぶばあい、そのあいだにうつ。

(イ) 重文のばあい。(文が終る形をとっていても、文意が下に続くばあいを含む。)

(例) 父も喜び、母も喜び

おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へせんたくに行きました。

(Ibid.) を挙げているが、これは英語の Punctuation では、まさに Semicolon を使うべきところであろう。

Exercises A,B,C,D を以て終っているのであるが、紙数の関係で内容は省略した。

3—4 外国の Vocational な教育の場における Punctuation 用法の位置はどうであろうか？ きわめて実践的な Business Letter Typing のための Text-Workbook として定評のある Typing Mailable Letters⁹ について見るならば、著者たちはまずその表紙に“Mailable Letter”（役に立つ手紙）作成のための基本的条件として次の6項目を挙げている。

Placement, Courtesies, Spelling, Punctuation, Capitalization,
Number Expression

そして Project 8, Project 9, Project 11 から Project 20 までを Punctuation の実際の用法を Key Point とする演習に当て、Letter 22 から Letter 27, および Letter 31 から Letter 62 に至る 38 通のまことに周到に Program された Business Letter の作成を通じてその技能を発展させる構成を取っているが、別に巻頭の Page vi から Page ix に至る Rules Summary の Section が附属していて、ここではきわめて簡潔に56項目に整理した Punctuation 関係の Rules を実例をそえ掲示してあり、参照の便に備えているあたりは見事である。

Office における Business Letter の原稿は、その 90 per cent に近く Dictate あるいは Oral Instruction で出されるという欧米の現状を考えるならば Stenographer あるいは Secretary にとって、自由自在に Punctuation を駆使する能力はきわめて有用である。教室での Training Course ならばいざ知らず、Dictator が Punctuation を指定してくれるはずはなかろうからである。およそ Typing Mailable Letters の全 Project 数は 25 であるから Punctuation はそのうちの12章を占めるが、これに、その内容から考えて広義の Punctuation に含めてもよい Project 10. Capitals を加えれば合計13章となり、過半数の 52 per cent となる。ちなみに、残る 12 の Project の名称を挙げるならば：Letter Placement；Paragraphing；Paragraph Display；Correspondence Courtesies；Attention and Subject Lines；Plurals of Nouns；Word Division；Number Rules：Figures vs. Words；Number Rules：Addresses, Dates, Money；Number Rules：Time,

9. Liles, Parker；Brendel, Leroy A. and Krause, Ruthetta：Typing Mailable Letters, Second Edition, 1969.

Measurements, Identifying Words; Dictation Challenge 1; Dictation Challenge 2 となっていることをご承知願いたい。こうした、それぞれの項目について、きわめて重要な内容を含んでいることは当然であるのに、その全体を合わせたものよりも多くの Project を、Punctuation 関係に対して費していることを強調したいからである。

3—5 わが国における英語教育、特に中学校における初期教育の場において、Punctuation の問題はどのように取り上げられ、織り込まれ、教育されているであろうか？

先に述べたような、英語を母国語とする国の大学生、あるいは職業訓練としての文書実務研修生とは、そもそもの基礎学力に大差があり、英語学習に対する動機・目的も全く異なることから、同日に比較するのは所詮無意味であるかも知れない。けれども、たとえば、わが国の中学校において外国語教育として行われる英語の学習についても、また程度の差こそあれ Reading, Speaking とならんで Writing も欠くことのできない到達目標のひとつであることは疑いない。Punctuation は主として Writing の場合に有用であることは、これを母国語として考えれば当然のことであろうが、わが国のようにこれを外国語として少年期より初めて学習するという条件を思えば、Reading の場合にもまたその論理的な内容理解を助ける上で大いに関係してくるわけである。

3—6 試みに、現在わが国で広く使用されている中学校用英語教科書のひとつ New Horizon¹⁰ について、その Punctuation 関係の部分を集録して見れば、次のとうりである。

場所

記事

- p. 1 Lesson 1 の Footnote ▷文は大文字で始める。
▷文の終りの（・）をピリオドという。
▷地名や人名は、文のとちゅうでも大文字で始める。
- p. 4 Lesson 3 の Footnote ▷問いの文の終わりの（？）を、クエス

10. New Horizon English Course, Revised Edition, Tokyo Shoseki.

ジョン・マークという。

▷ Yes と No の次の (,) をコンマという。

▷ isn't の (') をアポストロフィという。

p. 18 Lesson 7 の Footnote

▷ Mr. や Mrs. は、文のどちらうでも大文字で始め、終りにはふつうピリオドをつける。

▷ I はいつも大文字で書く。

p. 35 Lesson 11 の Text

Ken: Good morning, Mike,
How are you?

Mike: Fine, thank you,
How are you?

のように Colon が出てくるが説明は何もない。以下 A: B: Kate: Nancy: のように Colon は再三登場する。

p. 68 Lesson 20 の Text

forty-five, twenty-five と Hyphen が出てくるが説明は何もない。

p. 73 Lesson 21 の Text

例文として

Yes, there is./No, there isn't.

と Diagonal が出てくるが説明は何もない。

p. 82 Lesson 23 の Text の例文

{ Yes, 1 am.
{ No, 1 am not.

と今度は Brace の型が出てくる。

p. 94 Lesson 26 の Text

They are spring, summer, fall, and winter.

They are March, April, and May.

Which do you like better, spring or fall?

のような Comma の用例があるが、説明は別にない。すくなくとも、Colon, Hyphen, Diagonal, Brace についてはこの教科書のどこにも、その一般的な用途あるいは名称についてさえ、全く説明は見当らなかった。

同じく New Horizon の Book 2 になると、Colon と Diagonal は頻繁に本文中に出てくるし、Parenthesis のほか Brackets も見えている。

p. 19 Lesson 5 の Text Helen: She said to him, "Don't sleep here. You must be quiet in the library."

として Quotation Marks が出てくる。ここにも説明はないし、Direct Quotation を Capital で始めること、Period が Closing Quotation の Inside に入ること、Double Punctuation の不要なこと等の説明は、すくなくともこの教科書には一切見当らない。Quotation Marks はその後盛んに登場する。そして例えば

p. 29 Lesson 7 の Text "Oh, please take it away," she cried.
のような用例が出てくるが、別に説明はない。

p. 33 Lesson 8 の Text Jane: Oh, Fred, it's my birthday!
をはじめ5回にわたって Exclamation point が出てくる。説明はない。

p. 43 Lesson 9 の練習 9:45 It is a quarter to ten.
として Colon が出ているが、説明はない。

p. 50 Lesson 11 の Text Jane is now staying in Washington,
D.C. with her friends.

とあるが、これは現代の用法からすれば

Jane is now staying in Washington, D.C., with her friends.

とすべきであろう。¹¹

すくなくとも City と State あるいは District とを併記する場合の Comma の用法については、こうした機会に触れておいた方がよいのではないか？

p. 54 Lesson 17 の練習 He went to Washington, D.C. last
September.

Jane has been in Washington, D.C.
for three days.

とあるから misprint ではない。

p. 86 Lesson 18 の Text In London people call it the "tube."
Why do they call it the "tube"?

と Quotation Marks with Other Marks of Punctuation の rule に関係する例文があるが、解説はない。すくなくとも、Period と Comma は常に Inside に置くが、Question mark と Exclamation point は文意によって

11. Rule 168, Reference Manual for Stenographers and Typists.

Inside に来る場合と Outside に置く場合とがあり、Double Punctuation を避けるという原則と関係して、この場合後者の用法にあたることぐらいは説明した方がよいのではないか。

p. 96 Lesson 20 の Text Tom: I'm sorry, Aunt Polly.
I was very hungry, because I....

と Ellipsis は p. 112 の次に附いている総合練習でも

How long ...? }
How many ...? } として出ている。

次は Book 3 である。

p. 77 Lesson 14 の Text Opening quotation marks に対応すべき Closing quotation marks を Paragraph の終りにそえずに、次の Paragraph もまた Quotation の続きであることを表示する用法が出ているが、解説はない。引用の終るところで、初めて Closing Quotation Marks を置いて明示するという例が、この Lesson で 2 回にわたり示されている。Footnote あるいは練習、まとめ、の中で示してやるべきではないか？ 指導書に解説を示して、担当の教師から徹底させるというだけでは不充分であると思う。事実筆者の記憶からすれば、New Horizon を履修したかなり素質のすぐれた生徒たちにしても、そのほとんどがこうした知識を持っておらず、教室での説明を受けた覚えはないと答えたことを申しそえたい。

そして、Book 1, Book 2, Book 3 を通じて、合計 340 頁、62 の Lesson を通じてついに Semicolon は現われてこなかった。いちおう、Book 3 ともなれば Clara Barton and the Red Crosss だの The Merchant of Venice も載っているわけだから、Semicolon のような、もっとも Major な Internal Punctuation のひとつが欠けていることにいささか奇異の感を抱いた。

3—7 もうひとつの中学校英語教科書 New Prince English Course¹² について見ることにしよう。

p. 6 註 文は大文字で始める。文の終りにピリオド(.)をつける。

p. 7 註 疑問文(問いの文)の終りにクエスチョン・マーク(?)をつ

12. New Prince English Course, Kairyudo.

— 16 —

4. エクスクラメーションマーク (!)
5. コンマ (,)
6. クォーテーション・マーク (“”) (‘’)
7. アポストロフィ (’)
8. コロン (:)
9. ダッシュ (—)
10. ハイフン (-)

の10項目に分けて、簡単な解説にそえて例文もあり、問題の Comma についてもいちおう Friday, February 22, 1974 とか 211 Adams Street, Madison のような用例も示してあり、Colon の解説も要を得ている。先に示した Text 中の事例についてこの Appendix をその都度参照すればよいわけであるが、その旨を Footnote で指示してやれば、一層親切だったと思われる。

3—8 Everyday English この他の教科書については煩雑をさけて例示しないが、中には Everyday English¹³, Revised Book 3 のように英国流の Style による Quotation を Text 中に持っているものもあって、しかもまったく説明がそえられていないから、例えば G.P.O. Manual や Gregg の Reference Manual に示してあるような Conventional Rules に慣れている者には違和感を覚えるし、もし、こうした知識の欠ける生徒たちにとっては混乱を生じはしないかと懸念される。すなわち

p. 16 Lesson 3 の Textit is called “autumn”.
they say you are “ill”.
They call it a “lift”.

と one word の quotation について、Period を Outside に出す用法を取っているが、一般には Periods and commas always go inside the closing quotation marks. (This placement is dictated solely on grounds of typographical appearance.) としており、Quotation が One word あるいは One letter (例えば “A.”) の場合にも例外を考えていない。¹⁴

そしてまた Everyday English の Book 2 では、まさに上掲の用法に従

14. Gregg Reference Manual p. 43, Rule 248

ってその Lesson 8 にしても Lesson 12 にしても、Period と Comma はすべて Quotation marks の Inside に収めてあるから、Book 3, Lesson 3 の表現はいささか Consistency を欠くものということにならないだろうか？

4 おわりに

わが国における初等英語教育の中で、Punctuation の用法に関する体系的な Program を設定することは望むべくもないであろう。もっとも、New Prince のように、教師側の対応が適切であれば相当の効果を期待できるような配慮を示した中学校教科書を発見できたことはひとつの収穫であった。筆者の経験からすれば、高校・大学と年を重ねて、累計すればそれこそぼう大な時間と労力を英語の学習に対して費しながら、Reading はまづまづとして Writing、それも小間切れ的な短文ではない一定の状況の下で目的に叶った文書を作成する過程において、もっとも力量の不足を露呈する学生が多かったことは事実である。その原因の大半は、英語を母国語とする人たちの間でいう文法の問題、すなわち、Paragraphing から始めて、Capitalization、Punctuation の用法等に対する知識と経験の欠如によるものであった。わが国においても Bilingualistic な言語・文書表現能力を有する Senior な Secretary の本格的な養成が必要とされるとき、例えば、前に述べた “Typing Mailable Letters” におけるような研修 Program の効果とその重要性が飛躍的に増加してくるであろう。そして、それに先行してその基盤となる “Practical English Handbook” のような着実な理論的 Approach を、英語教育の体系の中に定着させなければならないと思う。その位置づけに対する検討は早速に開始されねばならないと考えるし、さらにまた、New Prince に見られるような初等英語教育における Good start をいよいよ促進させるべきであろう。そのための現実の障害としては、何よりも真の意味での Writnig に慣熟せず、従って指導力に乏しい英語担当教師自身の再教育という皮肉な現象が顕在化することも覚悟しなければならぬ。

極端な場合には、Punctuation mark の名称すら満足に知らない大学生のあることもまた現実の問題である。これはまた、そもそも英語教育の目標とするところは何かという根源的な命題に立返ることとなる。英語教育

の任に携わる者のひとりとして無為にすごせないのではないか？

「外国語に縁なき者は自らの国語をも知ることなし」というゲーテの言葉を今さらのように思い出すことなのである。

〔1978年8月末日稿〕

Pidgin English¹⁾

——その発生と特徴——

杉 本 豊 久

1. はじめに

お互いに共通の言語を持たない人々が接触し、ある特定の目的の為に相互理解が必要になると、それぞれの母国語とは別のごく小規模な言語体系が生まれる。これが Pidgin (Language) である。この種の言語体系はお互いに接触する人々のもつ母国語と比べて語彙が著しく少なく、文法の構造もかなり単純化されており、通常は社会的接触という特殊な状況においてのみ機能を果たすことから補助言語 (Auxiliary Language) とも呼ばれ、中でも主として商取引の為に接触に使われる補助言語を通商混成語 (Trade Jargon) とも言う。また、接触する人々は別にそれぞれ独自の母国語を持っており、彼らが属する言語社会のメンバーとの日常生活では母国語が言語行為の中心を占めるわけであり、したがって Pidgin (Language) はその周辺部を成すことから周辺言語 (Marginal Language) と呼ばれることもある。そして、Pidgin から成長してある言語社会の第一言語 (母国語) になったものを creole あるいは creolized language と呼ぶ。²⁾

このような社会的接触現象は現代に至るまでの長い歴史の間に世界中のあらゆる大陸で何度も起ったに違いないし、またその接触の際の状況も様々であっただろう (Anderson, 1973) が、特に15世紀以来のヨーロッパの拡大に伴って世界各地の植民地を中心に、ヨーロッパの諸言語 (ポルトガル語、英語、フランス語、等) と土着言語との間に多くの Pidgin (Language) が生まれた。その中で英語と土着言語との間に生まれたものを Pidgin English あるいは English-based Pidgin という。

ヨーロッパ人と現地人との接触の形態は大きく2つに分けることができる。そのひとつは、大西洋を中心とする地域、特に合衆国南部諸州、南アメリカ、及びカリブ海周辺地域での場合でこれらの地域での接触形態は奴隷対その所有者という非対等の関係であり、Pidgin の発生は強制的なも

のであった。互いに異なる言語を話す西アフリカの多民族が奴隷としてこれらの地域に連行され、強制的に集団生活を強いられたわけで、彼らはお互いの意志伝達の為に自分達の母国語とはまったく別の言語（彼らと接した白人達の言語）を習得することを余儀なくされたのである。今ひとつのケースは、大太平洋の北西部及び南西部の港町を中心とした地域で商取引あるいはそれに似た目的の為に、ある程度対等な関係で接触した場合で、これらの地域での Pidgin の発生は強制されたのではなく、自発的なものといえる。Chinese Pidgin English などはその例といえよう。したがって、すべての Pidgin の発生を社会的に上下の関係と結び付けて考えるのは不正確である。

2. Pidgin という用語

この Pidgin という用語は、今日では今述べたような多言語使用 (multilingual) 地域での伝達手段として発生し、単純化された補助言語を指す用語として広く用いられているが、その語源については今だに完全な納得のいく説明はなされておらず、学者により様々な仮説が提案されてきた。中でも最も一般的なものは *O.E.D.* による定義で、中国で Chinese (Trade) Pidgin を話していた、英語を母国語としない人達（主として中国人、ロシア人、ポルトガル人、等）によって作られたもので、英語の *business* の発音が中国語式に転訛したものとする説である（英語の /b/ 及び /z/ がそれぞれ中国語の /p/ 及び /ʒ/ に当たり、E. [bíznis] が Chin. [pízinz] となった）。しかし、R.A. Hall, Jr. (1955) はこの音変化の過程に疑問を持ち、両者の中間段階に *bishness* という異形の設定を提案している。又、ポルトガル語の *ocupação* (= 'trade, job') が転訛したものとする説もある (Leland, 1876)。たしかに歴史的にみればポルトガル人はアジア、西アフリカ、南アメリカにおける最初のヨーロッパ商人達であったのだから、この単語の中国語式異形が使われた可能性はあるが、その音声変化の説明に多少難点がある（即ち、語頭の音節 *ocu* の脱落については類例がある (*lim* < eleven, *pili* < emperor) が、強勢及び母音変化の点で説明が困難である)。D. Kleinke (1959) は南アメリカの Yayo 語の *pidian* (= 'people') に由来することを指摘した。既に17世紀初頭西インド諸島で使われていたこの単語が英国人船員達によって東インドへ運ばれ、Chinese (Trade)

Pidginに残ったとする説である。この仮説の長所は、音韻的にも意味的にも説得力があるし、pidgin という単語がなぜ Chinese Pidgin を指すだけに留まらず世界中の補助言語を指す用語として広まったのかを比較的容易に説明できるという点である。しかし、この主張の根拠となった出典の *Pidians* が *Indians* の誤植であった可能性が指摘されており (Todd 1974, p. 22), またこの単語が中国に渡ったとされる 17 世紀初めから 1850 年に *pigeon* が使われるまでの約 2 世紀以上もの間これが存続していたことを立証する記録がない、などの難点もある。この他にも、ポルトガル語の *pequeno* (=‘offspring’) に由来するという説とか、ヘブライ語の *pidjom* (=‘barter’) から派生したとする説 (Todd, 1974), さらに中国語の *Pi chun* (=‘standard’) からきたものとする説 (これを上海では [pi jun] と発音した) もある (安池忠夫, 1939)。この様に実に色々な仮説があり、どれが最も妥当であるかをここで決めるのは不可能である。むしろ、これらがすべて Pidgin という用語の普及に多少なりとも関り合いを持ち、さらに英語の *pigeon* によってその普及が促進されたと考えるのが適当かもしれない。

さて、Pidgin (Language) の言語体系の単純性については先程指摘したが、その為に過去においては一般に不完全で寄せ集めの破格言語であり、したがって価値の低い劣等言語にすぎないと見做され、学問的にも Jespersen (1922), や Bloomfield (1933) など Pidgin の重要性について指摘はしているものの 1950~60 年代になってこの種の言語研究が盛んになるまでは大部分の学者はあまり興味を示さなかった。

3. Pidgin の発生

そもそも Pidgin が如何にして発生したのかという問題については現在までに何人かの学者がそれぞれ独自の仮説を提案しており、ここではそのうち主なものを幾つか紹介し、その包括性、即ち世界中のできるだけ多くの Pidgin を説明し得るかどうかという点を評価の尺度として、それぞれの仮説の妥当性を検討してみることにする。

まず、Pidgin という言語体系を子供が (あるいは大人が子供に対して) 話す不完全な発話と関連付けて、その発生過程を説明しようとした学者達がいる。彼らは Pidgin の言語的諸特徴が言語習得における初期の子供達

の発話に類似していることに気付き、どちらの場合も初期の段階における言語の不完全な習得、即ち単語の意味、発音、文法についての不完全な知識が原因で同じような結果を生じたのだ (Jespersen, 1922) とか、ヨーロッパ人が現地の住民と接する際に、彼らの未発達で不正確な発話に合わせて自分達もこの単純化された発話を用いて対応した。これが定着して Pidgin になったとする説 (Bloomfield, 1933) などがある。しかしこれらの仮説は、1) なぜ Pidgin がその基礎となったヨーロッパの言語とお互いに理解不可能であるのか。2) それぞれ異なるヨーロッパの言語を基礎とする Pidgin が多くの点で類似しているのはなぜか。という 2 つの一般的事実を説明していないという点で限界がある。

R.A. Hall, Jr. (1964) は世界中に存在する Pidgin に共通の類似点があることをいち早く認めた学者の 1 人である。しかし彼は Pidgin の多くが独自に発生し、お互いに関係をもたずしてそれぞれ発達したものと考え、Pidgin 間に見られる類似性はこれらの言語がすべて印欧語族から派生したこと、そして大西洋を中心とした地域の Pidgin の場合には、その話者の大部分が西アフリカに共通の言語的基盤 (a common West African Substratum) を共有しており、しかも奴隷という同じような物理的・社会的境遇を経験している点を認めることにより説明可能であると主張した。彼の説は Pidgin 間の類似性に着目したという点では先程の仮説よりもより広い視野から Pidgin をとらえていると言えるが、次の 2 点で疑問が残る。即ち、1) 太平洋及び大西洋の両 Pidgin 群の間に、標準英語には見られない様な共通の特徴があること (例えば、丁寧な命令を示す *make*³⁾、及び *too much* (very) の使用⁴⁾ や文否定辞の位置などが両者に共通している)。2) 西アフリカの諸言語が大西洋 Pidgin の形成に貢献したことは否定できないが、これらを話す奴隷達は西アフリカの各地から集められてきたのであり、彼らの言語的背景の類似性をあまり強調し過ぎるのは危険だということである。

船員用語 (nautical jargon) が多くの Pidgin の基礎であったとする主張もある⁵⁾。航海の際には、それぞれ別々の国や地域から来た船員達がひとつ船に乗り、長期間の生活を共にせねばならなかったわけで、必然的にお互いの共通語を発達させざるを得ない状況にあったということ、そしてこの種の船乗り混成語 (sailor's lingua franca) はアジア、アフリカ、ポリ

ネシアなど船が寄航したあらゆる地域に運び伝えられた可能性がある、というのがこの仮説の骨子である。この混成語が世界各地に Pidgin 発生の為の核を提供し、今度はそれぞれの地域の住民が自分達の母国語をモデルにしてこれを発達拡大させていったという可能性は十分あるし、Pidgin 間に見られる類似点（これは船員用語という共通の核によるもので、事実ヨーロッパの言語を基礎としたあらゆる Pidgin にこの種の語彙が見られる）と非類似点（これは各地域の母国語の影響によるもの）とを首尾良く説明できるという点で説得力がある。しかし、Pidgin English と他のヨーロッパの諸言語（フランス語、ポルトガル語、スペイン語、オランダ語、等）を基礎とする Pidgin との間に見られる多くの類似点を説明するには、むしろ次の発生一元説（monogenetic theory）の方が便利である。

これは、大西洋及び太平洋のすべてのヨーロッパの諸言語を基礎とした Pidgin は 16 世紀の Portuguese Pidgin から派生したものであり、一方この Portuguese Pidgin は中世の多言語使用の状況にあった十字軍及び地中海沿岸で活躍していた商人達の共通の補助言語であった Lingua Franca（あるいは Sabir）のなごりであったとする説である。15 世紀にアフリカの西海岸を航行したポルトガル人と接したアフリカ人はまず最初のヨーロッパ文明のことばとして Portuguese Pidgin を習得した。その後、16 世紀から 17 世紀にかけてポルトガルの影響が下火になり、一方さらに多くの接触地域でこの Pidgin が引き続き使われるにつれて、その話者達は各地域での優勢言語（英語、スペイン語、等）から語彙を借用し、いわゆる訪彙交替（relexification）のプロセスを経てますます Pidgin は成長拡大していった。例えば、西アフリカのある地域で 17 世紀初期までは Portuguese Pidgin が最も広範に使われていたが、その後イギリス人が交易・政治の中心を占めるようになると、最初のうちはイギリス人もこの地域のアフリカ人との意志疎通の為にこの Portuguese Pidgin を学ばざるを得なかったが、やがて英語の語彙も使われるようになりポルトガル語系と英語系両方の語彙の混合使用の段階（Jespersen, 1922）を経て、ついには英語の訪彙がポルトガル語のそれに取って替わり、訪彙交替のプロセスが完結したというわけである。西アフリカの諸言語は一般に語彙の面ではそれぞれかなり異なるようだが音韻や文法の面ではその特徴の多くを共有している。したがって、彼らが必要上それぞれ異なる地域の言語を学ぶ際には主として

訪彙だけを習得すれば良かった。彼らはこの種の経験に慣れていたもので最初にポルトガル語の語彙を習得するのも、又やがて他のヨーロッパの言語の訪彙を習得するのも比較的容易であつたであらう。そして、このことが語彙交替のプロセスをさらに促進した可能性も十分考えられる。

ポルトガル人はインド及び極東においても最初のヨーロッパ商人であつたわけで、Portuguese Pidgin が Chinese Pidgin English, Micronesian Pidgin English, Melanesian Pidgin English 等のモデルであつた可能性もある。事実、ほとんどすべての Pidgin English の中にポルトガル系の語彙がみられるし、又構造面でもこの種の特徴が発見されている。⁶⁾

この様に、Sabir から派生した Portuguese Pidgin がヨーロッパの諸言語による訪彙交替のプロセスを経て大西洋・太平洋の Pidgin が生じたとする発生一元説は、あらゆるヨーロッパの言語を基礎とした Pidgin を包括できるという点で大きな魅力があるが、この包括性も実は完全とは言えない。というのは、ヨーロッパの言語とは無縁の Pidgin もこの地球上には存在するからであり、しかもこの種の Pidgin も今までに述べたすべての Pidgin に共通の特徴を幾つか備えているからである。例えば、西部ザイルやその周辺地域で広く使用されている Kituba は Bantu 系の言語 Kikongo 語から派生した Pidgin であるし、又南ア連邦及びその近隣諸国で話されている Fanagolo は Zulu 語を土台として出来た Pidgin である (Trudgill, 1974, p. 169)。ニューギニアの Papua では Motu 語を基礎とした Police Motu という Pidgin が使われているし、又合衆国北西部で毛皮の商取引をしていた Chinook Indian の言語をもととした Chinook Jargon も一種の Pidgin といえよう。これらは、語の文法的関係が語尾変化(形態的变化)というよりは語順によって示される傾向があり、その結果語順が固定化するという点でヨーロッパ諸言語から派生した Pidgin と共通しているのである。

結局、今までに紹介した個々の仮説単独ではすべての Pidgin に共通な特徴の存在を包括的に説明することはできないのである。そこで今ひとつの仮説を紹介する。今までの仮説は Pidgin の類似性とその発生を説明するのに過去における単一の祖語あるいは幾つかの言語に目を向けてきたのだが、そうではなくまったく別の意味での“共通の発生源”，即ち接触という状況に特有の普遍的言語行為のボタンがあるのではないかという点に

注目しようというのである。もし仮に、1) 人間は普遍言語(特定の個別言語ではなく)を習得する能力が生来遺伝学的に備わっているということと、2) その能力の中に、ある特定の状況、即ち言語の接触という状況において特有に見られる単純化プロセス(つまり Pidgin の発生をもたらすプロセス)も含まれているということ、の2つを仮定すれば(何らかの形でこれを立証することができれば良いのだが)、過去・現在を問わず、又あらゆる大陸のすべての Pidgin に見られる類似性を当然の結果として説明できるわけである。⁷⁾ そうすれば、あらゆる Pidgin に共通の特徴(構造上の単純化)はすでに遺伝学的に人間に備わった普遍的な言語規制に起因するのであるから、アフリカあるいはヨーロッパの諸言語を基礎とするいわば“原始 Pidgin”なるものを無理に設定する必要もなくなる。これは極めて雄大な仮説であり、何よりも今までに紹介したすべての仮説と対立することなく、むしろこれらをすべて包含できるという点で最も柔軟性があり妥当性の高いものと言えよう。Pidgin という現象の発生を特定の時代・場所に限定するのではなく、ある Pidgin はお互いに関連し合って発達し、又他の Pidgin は逆に独立して発生し、発達したと考える。しかし、いずれの話者達も元来人間に備わった能力に従って、それぞれ独自の言語学的状況に対応しながら Pidgin を発達させてきたというのである。他の仮説と同様、これを決定的に立証することは不可能であるが、この仮説を支持する事実を幾つかあげることはできる。そのひとつは子供の言語習得にみられる事実である。子供は限られた量の、しかも大部分は不完全な発話(一次資料)を手本として極めて短期間に与えられた言語の文法を習得する。しかもこの一次資料は同じ社会に属する子供によってそれぞれ異なるにもかかわらずほぼ同じ文法を習得する。そして、それをもとに無限の新しい発話を創造したり、それに応答したりすること習得する。まだ手足も自由にこなせないし、推論する能力も極めて未発達な時期にこの様な高度な技術を習得できるという事実はこの仮説の強力な支えと言えよう。また、医学的にも言語中枢の存在が確認されていること、さらに発話の開始からこれに熟練するまでのプロセスがすべての人間の子供に共通した規則をもっていることなども言語習得が遺伝学的に備わった人間の能力であることを支持する根拠となろう。最後に、Pidgin 発生のプロセスもこの能力の一部に含まれるとする第2の仮説を支持する根拠と見解を指摘しておこう。母

親（大人）は子供に話しかける時には決まって自分の発話を無意識に単純化させる。この様な言語行為は人間に本来備わった単純化のメカニズムに従って無意識に反応していることを暗示しているし、又この種の単純化プロセスを初めから言語社会における特殊な言語使用域（register）として認め、この様な言語使用のみによる伝達行為が Pidgin を発生させたと考える学者もいる。⁸⁾ 子供はある年令に達するとこの種の言語使用域を越えて、社会的要求に応じたさらに広範かつ柔軟な言語使用を含んだ大人の言語を習得するが、Pidgin の場合にはこれに相当する社会的要請がなかった為にこの段階で硬直化し、そのままの状態が維持されたというわけである。

4. 言語的特徴

Pidgin English に限らず Pidgin (Language) は共通して限られた語彙と極めて単純化（縮少化）された文法構造をもつ。一般に Pidgin (Language) はたとえば Chinese dialects と English, African dialects と French, African dialects と Portuguese, 等というように幾つかの言語の融合から生ずるものだが、だからといってこれらの融合した諸言語の単なる寄せ集めから成るというわけではない。即ち、Pidgin (Language) はそれ独自の構造を持ち、体系を成している。次に、具体的な諸特徴を発音、語彙、語形、文法に分けて解説する。なお、資料は主として Melanesian Pidgin 及び Chinese Pidgin でありそれぞれ MP, CP と略記する。⁹⁾ その他の Pidgin についてはその都度表記することにする。

(1) 発音

一般に Pidgin の音素体系はかなり単純化されている。これは主として現地の母国語の発音習慣が Pidgin に持ち越される為で、Pidgin 話者にとって聞き慣れない音は除去され、他の母音によって代用されたり、また紛らわしい子音同士が混同して用いられったりするケースがある。母音の構造は /a, e, i, o, u/ の5つの母音に縮少され、二重母音、長母音などは単母音化する傾向が強い。

wik (=week), de (=day), meki (=make), tumæci (=too much),
livi (=leave), pe me (=pay me), tɔki (=talk), tebal (=table),
mo (=more), sapos (=suppose), (CP). fes (=face), tok (=talk),
(M P).

又、語頭の母音が脱落したり、子音で終る単語の語尾に特定の母音を添加する (paragoge) こともある。これは特に CP に多い。

long (=along), nadarfela (=another), (MP).

wɔŋçi (=want), meki (=make), kæçi (=catch), tɔki (=talk),

olə (=old) čailə (=child), silka (=silk), (CP).

子音についてもかなりの縮少とそれに伴う幾つかの変化が見られる。まず、Pidgin 話者の母国語にない子音、例えば歯間摩擦音 /θ, ð/ などは除去され、これらに比較的近い子音 /t, d/ でそれぞれ代用される。¹⁰⁾

tinktink (<think-think='opinion'), trifela (=three), tit (=teeth),

tausen (=thousand), samtiŋ (=something), disfela (=this),

nadarfela (=another), ɔltəɣɛdar (=altogether), (MP).

dat (=that), distaim (<this time='now'), (CP).

英語の /f, v, sh, z/ はそれぞれ /p, b, s, s/ で代用される。

pinis (<finish='already'), pait (=fight), paia (=fire),

hebi (=heavy), srank (=schränk), (MP).

səpos (=suppose), (CP).

特に CP では /r/ が /l/ で代用される。なお、西アフリカの Pidgin には /r/ と /l/ が合併し、一種の自由変異 (free variation) となっているものもある。

solly (=sorry), glave (=grave), thlee (=three),

vɛli (=very), (CP). alata, arata (=rat), (West African Pidgin).

また、母音直後の /r/ がしばしば脱落するが、この現象も Pidgin English だけでなく、フランス語を基礎とする Haitian creole にもみられる。

hard wok (=work hard), (MP).

mo (=more), (CP).

poté (<porter='to carry'), (Haitian creole).

特に MP において、子音 /b, d, g/ はしばしば直前に鼻音を伴ってそれぞれ /mb, nd, ng/ と発音される。これは MP 話者達の母国語の発音の特徴がそのまま持ち越されたものである。

tabu→tambu (=prohibition), sidaun→sindaun(='sit').

語尾子音連結の多くは縮少され、又複数の子音連結形の多くは現地人にとって発音しにくい為に特別な母音を挿入して発音するいわゆる語中音添加

(epenthesis) の現象がみられる。

lamp→lam, klir→kalir, kilir (=‘clear’)

olsem→olasem (=‘so’), (MP). tebal (=‘table’), (CP).

(2) 語彙

語彙量が極めて少ないということも Pidgin の大きな特徴である。最も無学な自然言語の話者でも2万語～2万5千語は備えているのに対し、Pidgin の場合は普通7百語～2千語である。しかし、数が少ないからといってすぐに Pidgin の語彙は貧弱だと早合点してはならない。個々の単語の不足はこれらの語彙によって作られる多数の結合形によりある程度は補われているからである (MP の場合、約2千語の訪彙で約6千種類もの表現が可能だとされている)。例えば、MP において *gras* は単に ‘grass’ 「草」という意味だけではなく、「髪の毛」、「ひげ」などのように「表面に葉状に生えたものすべて」を意味し得るのであり、*gras bilong hed* (=‘hair’), *gras bilong maus* (=‘moustache’), *gras bilong fes* (=‘beard’) という具合に使われる。訪彙の絶対数が限られているから必然的に個々の単語はより広範な現象の意味を受け持たざるを得なくなり、意味の拡大、重複を招く。そこで、これを言い替え (paraphrase) のプロセス、即ち基礎語彙を用いて *gras* の場合のように新たな語結合を作ることにより、拡大されたそれぞれの意味を分類整理しているわけである。¹¹⁾

savvy box (=‘brain’), walkee-walkee fish (=‘live fish’),

joss (=偶像), joss-house (=寺), joss-pidgin (=宗教),

joss-pidgin man (=僧侶), (CP).

一般に Pidgin の語彙はその大部分は優勢言語から借用したものである。例えば MP の場合は約80%が英語からの借用語であり、残りのうち約10～15%ぐらいが土着言語から採ったものである。また、CP の場合は約7百語の訪彙のうち中国語からの借用は僅か1～2%であり殆どが英語の語彙に頼っている。これを他の自然言語と比較してみると、例えば英語はその訪彙の約50%以上が英語以外の言語 (フランス語、ラテン語、ギリシア語、等) からの派生語であるから語源の混成度からすれば、奇妙なことに Pidgin の方が英語よりも低いことになる。Pidgin (Language) は間に合わせの“寄せ集め”にすぎないという純粋主義者達の非難も語彙の混成度に関する限り当らないようだ。一方、個々の語彙の内容を検討してみる

と、初期に接触した下層階級のヨーロッパ人達のことばや船乗りことばなど一般のヨーロッパ人にとっては比較的粗野と思える語彙もあるが、現地人にとってはこの様な意識はあまり無く、しかも先程触れたように単語自体の意味が極端に拡大されてしまい、当初の下品な意味も薄れてしまっていることが多いようだ。¹²⁾ 例えば MP においては、*ars* は ‘bottom’ の他に ‘base’, ‘cause’, ‘reason’, ‘source’ など意味する。

(3) 語形

土着言語の意味に基づいた借用代行 (loanshift) を通して英語の構成要素の変形及び再構成がしばしば起こる。例えば、CP では複数表示としての屈折語尾はなく、すべての数詞に接尾辞 *-pisi* (= ‘piece’) 及び *-felə* (= ‘fellow’) を付加する。

wənpisi (=one; inanimate), wənpisi haws (=one house),

tu pisi tebal (=two tables); wənfelə (=one; animate),

wənfelə mæn (=one man), forfelə man (=four men).

これは中国語の numeral classifiers の用法をモデルにして英語の *piece*, *fellow* にこれを適用し、発展させたものである。¹³⁾ さらに接尾辞 *-said* は ‘place where’ を、また *-taim* は ‘time when’ を指し、どちらも名詞及び代名詞に付加される。

hi haussaid (=at his house), dok said (=at the dock),

mai said (=where I am), hwattaim? (=when?), distaim (=now).

一方、MP には単語の形と機能を示す種類の接尾辞がある。

1) *-fela*...代名詞 *mi* (=‘I, me’) 及び *yu* (=‘you, 単数’) に付加されて複数形 *mifela* (=‘we, us’) 及び *yufelə* (=‘you, 複数’) を作る。

2) *-fela*...指示代名詞、不定辞、数詞及び単音節の形容詞などを示す。
disfela (=‘this’), nadarfela (=‘another’), tufela (=‘two’),
gudfela (=‘good’).

3) *-im* ...動詞に付加されてそれが他動詞であることを示す。

tokim (=‘speak to’), cf. tok (=‘speak’)

faitim (=‘strike, hit’), cf. fait (=‘fight’).

以上のような接尾辞を付加するプロセスの他に、品詞の分類方法にも話者の母国語から派生したと思われるものがある。例えば、MP の場合、代名詞に *yumi* (聞き手を含む we, us) と *mifela* (聞き手を含まない we, us)

の区別がある。これはこの地域の母国語にみられる特徴（第一人称複数形の inclusive と exclusive との区別）を反映したものである。同じく、MP は‘代名詞+数詞’という形式（具体的には、*mi trifela* (=‘the three of us’), *yu tufela* (=‘the two of you,’), 等)を採用しているが、これも土着語にみられる dual 及び trial と呼ばれる特別な分類形式に対応するものとされている。また、訪衆に関して先程指摘した意味の拡大が代名詞にもみられる。例えば、CPにおいて人称代名詞 *hi* は‘he, him; she, her; it’のいずれにも使える（即ち、*hi* には性別表示はないことになる）し、さらに *maj* は‘I, me, mine; we, us, ours’のすべての代用が可能である。

(4) 文法

Pidgin では文法的な屈折語尾（時制、数、性、格の変化形）、冠詞、前置詞及び Copula の使用が極端に単純化されているが、その分を語と語の関係を示すもうひとつの手段、即ち語順に大幅に依存している。一見単純な単語の並置が様々なタイプの句構造を表わすのに役立っている。まず MP の名詞句においては、数詞及び単音節の形容詞は主要語に先行するが、複音節の形容詞や名詞による修飾語句は主要語の後に置かれる。

naispela ples (=‘a nice place’),
gutpela samting (=‘something good’),
meri marit (=‘a married woman’),
haus moni (<house for money=‘bank’),
haus sik (<house for sick=‘hospital’).

また、第三人称を示す接頭辞 *i-* を動詞あるいは名詞に付加する用法があり、これもこの地域の土着語にみられる同様な接頭辞 *e-* の用法の反映である。

Em i-go (=‘he goes’), *San i-lait* (=‘the sun shines’),
leg bilong im i-swɛləp (=‘his leg swelled up’),
dis fela man i-gudfela (=‘this man is good’),
ol i-hard wok (=‘they work hard’).

さらに、「所有」を表わすのに前置詞 *bilong* (=‘of’) を用いた句形式によって示す。

pikinini bilong king (=‘a king’s children’),

haus bilong me (=‘my house’),
master bilong yu (=‘your master’).

一方、CP では修飾しようとする名詞の直前に名詞又は代名詞を置くだけで「所有」を表わすこともできる。

dat master poni (=‘that master’s pony’),
yu legan (=‘your legs’).

この他に、‘AXIS+RELATION’の構造をもつ特殊な表現があるが、これは同様の意味を表わす中国語の句構造からの借用によるものである (Hall, 1964).

tebal tapsaid (=‘on the table’),
nin-po mo far (=‘beyond Ning-Po’).

前置詞及び接続詞¹⁴⁾は大幅に単純化される。次の実例は、上海における later Chinese Pidgin であるが、前置詞が殆んど使われていない。¹⁵⁾

She must live ϕ Shanghai, never contree.

One day I come ϕ Shanghai ϕ visit my sister.

We no b’long ϕ foreign people.

ϕ Summer be sittee ϕ cool place.

先程あげた *bilong* 及び *long* などは数少ない前置詞の実例であり、それぞれ関係の‘密接度’を示している。

haus bilong mi (=‘my house’), man bilong toktok
(=‘a loquacious fellow’), taim bilong pait (=‘the war years’),
wara bilong waswas (=‘bath water’), stap long haus
(=‘to be in the house’), kam long kanu (=‘to come by canoe’),
rait long pepa (=‘to write on paper’), bilip long Got
(=‘to believe in God’), (MP).

一般に Copula の省略が広範に渡ってみられる。

Lek bilong em i-bagarap (=‘His leg is badly injured’),
mi plisboi (=‘I am a policeman’), Yu redi? (=‘Are you ready?’),
tinktink bilong me olsem (=‘My opinion is this.’),
Masin i-bagarap (=‘The machine is out of order’), (MP).
maj plenti bizi (=‘I’m very busy’), (CP).

標準英語にみられるような複雑な屈折を伴う助動詞の用法 (例えば、時

制,¹⁶⁾ 相, 態, 叙法の表現形式)の代わりに, Pidgin には幾つかの不変化詞 (particles) がある。これらには, 英語の 'by and by' (>*baimbai*, *bai*), 'altogether' (>*olgera*), 'already' (>*alredy*), 'tomorrow' (>*tomolow*) のような副詞表現から派生したもの, 'stop' (>*stap*='stay'), 'finish' (>*pinis*='already') などの動詞から派生したもの, あるいは 'it is good' (>*i-gut*) のような句構造から派生したものなどがあり, 位置的に不安定であるし, 又それぞれ異なった要素から派生したものであるから, これらを助動詞として扱うよりも一種の副詞の不変化詞と見なすのが妥当である (Quirk, 1972, p. 58).

このように、標準英語における助動詞の用法が、Pidgin においては大幅に削減され、その為が生じた表現上の不足分をこれらの不変化詞の用法により補っているといえよう。なお、Pidgin では助動詞がまったく使われないというのではなく、次に示すように ken (=‘can’), lar (=‘let’), bin (=‘been’), save (=‘can’) などが時々使われる。

($\langle$ 'I can't make the engine [be] good again'='I can't fix the engine again)

に比較して単純だと言われている Pidgin の動詞体系の複雑性を補う数少ない特徴のひとつといえよう。

否定文を表わすには否定辞 *no* を主語と動詞の間に挿入するだけでよい。¹⁷⁾

ju no kæn go lɔŋ biglajn. (=‘You cannot go to the work-group.’),
mi no lajk go wəntajm ɔl. (=‘I did not want to go with them.’),
(MP). maj no hæv kæçi buk. (=‘I haven’t brought a book’),
maj sævi misi no wɔnçi ðisfæ šan. (=‘I know missy doesn’t want
this kind.’), tumolo maj no kæn kəm. (=‘Tomorrow I can’t
come’), (CP).

ただし、主語が第三人称の場合には次の実例のように、接頭辞 *i-* が *no* に付加される。

Ol i-no go (=‘they are not going’)

Dispela kanu i-no gutpela (=‘this canoe is no good.’), (MP).

疑問文は主語と助動詞の語順を変化させず、イントネーションのみで表わす。

misi hæv gat buk? (=‘Has missy a book?’)

misi kæn kəm tumolo? (=‘Can missy come tomorrow?’)

hawmæç ju wɔnçi? (=‘How much do you want?’), (CP).

5. まとめ

ヨーロッパの言語を基準にしてみれば、Pidgin は語彙も少なく、発音も不正確に聞こえ、文法もかなり破格であるように見えるが、この様な偏見を捨てて、純粹に公平な立場から Pidgin の特徴を観察し直してみると、少ない訪衆は豊富な語結合である程度補われ、不正確に聞こえる発音も大部分はお互いの母国語の音素体系の違いによるものであり、現地の言語の発音習慣が大幅に反映されていることがわかった。また、文法面でもヨーロッパの諸言語の屈折語的性格を失う代わりに現地語の文法を反映した膠着語的 (agglutinative) 性格を備えている。例えば、動詞体系にみられた接辞 *i-* 及び *-im* の用法とか、代名詞 *yumi* 及び *mipela* の使い分けなど標準英語には見られない特徴を備えていることがわかった。したがって、Pidgin は従来一般に考えられてきたような、単にヨーロッパの言語の中

途半端な習得による寄せ集めの“間に合わせ”の混成語 (lingua franca) ではなく、さらに成長した段階の言語体系、即ちその話者達によって完全に再構成された独自の言語というべきであろう。規模は小さいが、接触状況において果たすべき機能を満たすのに十分なだけの安定した体系を備えているのである。

NOTES

- (1) 今回の論文作成については立教大学教授村田勇三郎先生の御指導・助言を受けた。
- (2) R.A. Hall Jr.. 1972. "Pidgins and Creoles as Standard Languages." in J.B. Pride and J. Holmes (eds) 1972, 142—53.
- (3) 例えば, 'Put out the fire' を表わす表現として, *mekim dai faia* (Melanesian Pidgin), *mek yu lɔs faia* (Cameroon Pidgin) がある。
- (4) 例えば, 'I'm very cold' の意味を表わすのに, Melanesian Pidgin では *mi kol tumas* が, また Cameroon Pidgin では *mi, a kol tumɔs* が使われる。
- (5) John Reinecke. 1938. "Trade Jargons and Creole Dialects as Marginal Languages." in Dell Hymes (ed.) 1964, 534—46.
- (6) Douglas Taylor. 1971. "Grammatical and Lexical Affinities of Creoles." in Dell Hymes (ed.) 1971, 293—6.
- (7) Todd, (1974), p. 42.
- (8) Charles Ferguson. 1971. "Absence of Copula and the Notion of Simplicity: a Study of Normal Speech, Baby Talk, Foreigner Talk and Pidgins." in Dell Hymes (ed.) 1971, 141—50.
- (9) R.A. Hall Jr. 1973. "Pidgin Languages." in P.W. Bailey and J.L. Robinson. (eds) 1973, 91—114.
- (10) また, /θ/ を含んだ単語が, /θ/ を含まない他の表現で代用されることもある。
 ex. nek i-drai (= 'thirsty'),
 i-no gat gris (= 'thin'), (MP).
- (11) この種の語結合 (複合語) は主として次の3つのタイプに分類できる。それぞれのタイプの実例を次にあげておく。
 a. 標準タイプ
 biksolwara (<big+salt+water='ocean'), toknogutim (<talk+no+good='to insult'), luksave (= 'to recognize'), sithaus (<sit+house='latrine').
 b. 動詞句から派生したタイプ
 bagarapim (<bugger up='to ruin'), eramutim (<air him out=

'divulge'), kirapim (<get up='to rouse').

c. 反復形のタイプ

lukluk (<look+look='gaze'), puspup (=to copulate), tantanim (<turn+turn='to spin').

このうち、反復形のタイプは土着語にみられる同類の複合語（例えば、*lim-limbur* (= 'to stroll'), *kaikai* (= 'food'), 等)の影響と思われる (Quirk, 1972, p. 60).

- (12) 確かに、初期の接触によって借用された語彙の中には粗野なものが多かった (例えば, *sarap* (<shut up='to be silent'), *bagarapim* (<bugger up='to ruin'), 等) が、最近の英語からの借用語にはこの種の傾向はみられない。

ex. *skul* (= 'school, lesson'), *kalenda*, *faunten pen*, *conpesio* (= 'confession'), *sekbuk* (= 'chequebook'), etc. (MP). (Quirk, 1972).

- (13) ただし、later Chinese Pidgin になると、*-felə*, *-pisi* による [+animate], [-animate] の区別がなくなり、*-felə* のみが使われるようになった (Turner, 1966, p. 203).

- (14) Turner (1966) は MP における基本的な接続詞として、*na* (= 'and'), *sapos* (= 'if'), *taim* (= 'when') などを指摘している。

- (15) 沖田 (1939) はこの種の前置詞の省略は上海語に日本語の助辞とか英語の前置詞に該当するものが少ないことに起因すると分析している。

- (16) Pidgin の動詞体系には標準英語におけるような時制の区別はない。したがって、状況によりこの区別が必要な場合には本文で述べたように不変化詞を補うことになるが、その実例を次に補足しておく。MP においては、例えば *man i-rit* は通常 'a man reads' 及び 'the men were reading' のどちらの意味にも解釈され得るが、文脈次第で前者は *wanpela man i-rit nau*. 又後者は *asde* (yesterday) *ol man i-stap rit* というようにそれぞれ別の表現を使うことも可能である (Turner, 1966, p. 205).

ex. *misi kæn kəm tumɔlo?* (= 'Can missy come tomorrow?'), (Hall, 1973, p. 106.)

Hi alredy buy car. (= 'He bought a car'), (CP). (安池, 1939).

- (17) なお、Jamaican creole では助動詞 *can* の否定形を音調の違いのみで表わすということが報告されている (Bell, 1976, p. 161).

im kyàn guo. (= 'he can go')

im kyáa guo. (= 'he can't go')

REFERENCES

- ANDERSON, J.M. 1973. Structural aspects of change. London: Longman Group Ltd.
BAILEY, P.W. and J.L. ROBINSON. (eds) 1973. Varieties of present-day

- English. New York : Macmillan Publishing Co., Inc.
- BELL, R.T. 1976. Sociolinguistics. London : B.T. Batsford Ltd.
- BLOOMFIELD, L. 1933. Language. London : Allen and Unwin.
- HALL, R.A., Jr. 1955. Hands off Pidgin English. Sidney : Pacific Publications Pty Ltd.
- . 1964. Introductory linguistics. Philadelphia : Chilton Books.
- HYMES, DELL. (ed.) 1964. Language in culture and society. New York : Harper & Row Publishers.
- . (ed.) 1971. Pidginization and Creolization of languages. Cambridge : Cambridge University Press.
- 岩崎民平, 1934. 「Pidgin English」. 『英語青年』 Vol. 72, No. 4.
- JESPERSEN, OTTO. 1922. Language: its nature, development and origin. London : Allen and Unwin.
- KLEINECKE, DAVID. 1959. "An etymology for "Pidgin"". *IJL* Vol. 25, No. 4.
- LELAND, CHARLES. 1876. Pidgin English sing-song. London : Trubner.
- 沖田 一, 1939. 「上海と英語」. 『英語青年』 Vol. 81, No. 2.
- PLATT, J.T. and H.K. PLATT. 1975. The social significance of speech. Amsterdam : North-Holland Publishing Company.
- PRIDE, J.B. and J. Holmes. (eds.) 1972. Sociolinguistics. Harmondsworth : Penguin Books Ltd.
- QUIRK, R. 1972. The English language and images of matter. London : Oxford University Press.
- TODD, L. 1974. Pidgins and Creoles. London : Routledge & Kegan Paul Ltd.
- TRUDGILL, P. 1974. Sociolinguistics. Harmondsworth : Penguin Books Ltd.
- TURNER, G.W. 1966. The English language in Australia and New Zealand. London : Longmans.
- 安池忠夫. 1939. 「Shanghai's standard English」. 『英語青年』 Vol. 81, No. 2.

Of Mice and Men について

(主人公ジョージとレニーの意味するもの)

深 沢 俊 雄

(1)

Of Mice and Men は、全体が六章から成り、一章はカリフォルニア州ソリダドの南、数マイルのサリナス川のほとりで、主人公ジョージとレニーが登場し、二人の夢が紹介されている。二章及び三章では、日雇い労働者達の農場の飯場での様子が描かれ、二章ではこの作品に登場するほとんどの人物が紹介され、三章では飯場の夜の情景にまじえて、ジョージの過去や夢が語られている。四章では納屋の張り出し小屋に住む黒人の佻しい姿がレニーと老人のキャンディをまじえて描かれている。六章では、舞台は再びサリナス川へ戻り、レニーがジョージの手によって射殺され、物語は終る。

要するに、物語はサリナス川とその近くの農場を中心に展開されている。すなわち、物語の場面は、サリナス川→農場の飯場→飯場の納屋→サリナス川という具合に統一されている。

時間からみても、木曜日の夕方から日曜日の夕方までの、わずか三日間のできごとに集約されている。すなわち、一章は木曜日の夕方、二章は金曜日の朝の十時頃、三章は同じ日の夕方、四章は土曜日の晩、五章は日曜日の午後、六章は同じ日の夕方という具合に展開されている。このように場所や時間の限定が物語に緊迫感を与え、話の盛り上がりと終結に非常な効果を与えているといえよう。そこで作者スタインベックが、この作品を通して、読者に訴えようと意図したものは何であり、また主人公ジョージとレニーの生き方と、この作品の中で主人公の果たす役割とを考察してみたい。

(2)

この作品は、プロットからみて多分に演劇的な要素を持っている。たと

えば、自分たちの一定の土地を持って暮らしたいと願うジョージとレニーの素朴な気持を中心に考えるならば、一章では彼らが心に描いている夢を展開させ、二章ではそれが必要性として展開され、三章では老人のキャンディが仲間入りして、彼が三百五十ドル持っているところから、十エーカーの土地を六百ドルで買い取るというジョージの夢は一カ月後に実現するかのように見えて、物語は頂点へと向かうのである。すなわち、

Candy said: 'I ain't much good with on'y one hand. I lost my hand right here on this ranch. That's why they give me a job swampin'. An' they give me two hundred an' fifty dollars' cause I los' my hand. An' I got fifty more saved up right in the bank, right now. That's three hundred, and I got fifty more comin' the enda the month. Tell you what.....' He learned forward eagerly. 'S'pose I went in with you guys. That's three hundred an' fifty bucks I'd put in. I ain't much good, but I could cook and tent the chickens and hoe the garden some. How'd that be?'.....

George spat on the floor disgustedly. 'We got ten bucks between us.' Then he said thoughtfully: 'Look, if me an' Lennie work a month an' don't spen' nothing we'll have a hundred bucks. That'd be four-fifty. I bet we could swing her for that. Then you an' Lennie could go get her started an' I'd get a job an' make up the res', an' you could sell eggs an' stuff like that.'

(Chapter III, p. 51~p. 52)

四章では頂点にきて実現間近い彼らの夢が、佗しい黒人の姿と対照的に、あるいは同じ渴望を持つ黒人に刺激され、絶対的実現への可能性を覗かせるのである。すなわち、

Lennie said quietly: 'It ain't no lie. We're gonna do it. Gonna get a little place an' live on the fatta the lan'.' Crooks settled himself more comfortably on his bunk. 'Set down,' he invited. 'Set down on the nail-keg.' Lennie hunched down on the little barrel. 'You think it's a lie,' Lennie said, 'but it ain't no lie. Ever' word's the truth, an' you can ast George.'

(Chapter IV, p. 59~p. 60)

Candy cried: 'Sure they all want it. Everybody wants a little bit of land, not much. Jus' some'thin' that was his. Some'thin' he could live on and there couldn't nobody throw him off of it. I never had none. I planted crops for damn near ever'budy in this state, but they wasn't my crops, and when I harvested 'em, it wasn't none of my harvest. But we gonna do it now, and don't you make no mistake about that. George ain't got the money in town. That money's in the bank. Me an' Lennie an' George. We gonna have a room to ourselves. We're gonna have a dog an' rabbits an' chickens. We're gonna have green corn an' maybe a cow or a goat.' He stopped, overwhelmed with his picture. Crooks asked: 'You say you got the money?'

'Damn right. We got most of it. Just a little bit more to get. Have it all in one month. George got the land all picked out, too.'

(Ibid., p. 64~p. 65)

ところが五章からは、この夢が一気に崩れはじめ、レニーの死となって物語は無残な結末へと結びついていくのである。

(3)

プロットをもう一つの視点、つまり、男同志の友情という点からたどってみた場合、一章では彼らの友情の源を語り、二章はその展開であり、三章と四章ではそれが必然となって頂点に達し、五章では暗いかげりとなって現われ、六章で悲劇の結末を迎えるのである。この劇曲化された悲劇の主人公である薄のろのレニーの幸福への夢は、やがてジョージが自分の土地を手に入れた時に飼わせてもらえることを約束した兎に託され、死んだ二十日ねずみや飯場での子犬を通して生き物への夢が一步一步ふくらみ、その頂点に達し、やがて自ら崩壊してゆくのである。ちょうど、これは『真珠』において、キノーがコヨティートに託す夢を、自分で見つけた世界一大きな真珠によって実現させようとした結果、自らが崩壊してゆく運命と共通している。そのほか、作者はさらに登場人物をしばり、ジョージとレニーに中心を置き、同じ幸せを求めながら、土地への執着についてはジョージに、二十日ねずみや兎など生き物に対する執着心についてはレニ

ーに話題を集中させ、それらをうまくミックスしながら、ジョージとレニーの夢を高めようとしている。その点では、わき役ともいふべき老人のキャンディや黒人の馬丁も大いにジョージとレニーを引きたてていることを見のがせない。

さらに演劇的な要素として、見落してはならない点は、ジョージとレニーの間に交わされる会話の巧みさによる作品構成と、対話の中での同じ言葉の繰り返しによる効果だと思う。会話自体が、既に読者に訴える力を持つ言葉が、二人の口をついて自然に出てくるのである。それが読者の想像を呼びおこし、絵画的印象を与えるのである。特に二人の間に交わされる言葉の反復は、印象を深め、読者の想像を呼びおこすばかりでなく、読者を舞台の観客にしてしまうような効果を持っているように思われる。すなわち、

Lennie's eyes were frightened. 'I don't want no trouble,' he said plaintively. 'Don't let him sock me, George.'

George got up and went over to Lennie's bunk and sat down on it. 'I hate that kinda bastard,' he said. 'I seen plenty of 'em. Like the old guy says, Curley don't take no chances. He always wins.' He thought for a moment. 'If he tangles with you, Lennie, we're gonna get the can. Don't make no mistake about that. He's the boss's son. Look, Lennie. You try to keep away from him, will you? Don't never speak to him. If he comes in here you move clear to the other side of the room. Will you do that, Lennie?' 'I don't want no trouble,' Lennie mourned. 'I never done nothing to him.'

(Chapter II, p. 28)

'Sure, George. I ain't gonna say a word.'.....'You keep away from Curley, Lennie.'

'Sure I will, George. I won't say a word.'

(Ibid., p. 29)

また、二十日ねずみといい、兎といい、間の抜けたレニーの質問といい、抜け目のない実現の可能性のあるジョージの答といい、それが互に強弱のバランスを保ち、具体的であるがゆえに、いっそう想像を喚起し、ジョージの土地へのあこがれと夢をかきたてるのである。

(4)

一方、薄のろで馬鹿力のあるレニーと小柄で敏捷なジョージとの組み合わせは、それだけでも戯曲的な要素を持ち、(3)でも述べたように、同じ言葉の反復も戯曲化には大いに役立っていると思われる。しかも、頭の弱いレニーを、薄のろの人間として終始させるだけでは何の意味もないと思う。

また、日雇い労働者達の惨状とその夢を描くことが作者のねらいであるとするならば、頭の弱いレニーの死は、生き残ったジョージの心の中に生かされていなければならないと思うのである。あるいはまた、男同志の友情が主題だとすれば、農場主の息子の妻をふとしたあやまちで死なせてしまったレニーを、リンチから救うために、レニーの射殺が、彼を愛するジョージの手によって行なわれるという安易な結末で物語を終らせたのでは、無意味であると思うのである。すなわち、

George raised the gun and his hand shook, and he dropped his hand to the ground again.

‘Go on,’ said Lennie. ‘How’s it gonna be. We gonna get a little place.’ ‘We’ll have a cow,’ said George. ‘An’ we’ll have maybe a pig an’ chickens... an’ down the flat we’ll have a... little piece alfalfa...’

‘For the rabbits,’ Lennie shouted.

‘For the rabbits,’ George repeated.

‘And I get to tend the rabbits.’

‘An’ you get to tend the rabbits.’

Linnie giggled with happiness.

‘An’ live on the fatta the lan’.’

‘Yes.’

Lennie turned his head.

‘No, Lennie. Look down there acrost the river, like you can almost see the place.’

Lennie obeyed him. George looked down at the gun. There were crashing footsteps in the brush now. George turned and looked

toward them.

‘Go on, George. When we gonna do it?’

‘Gonna do it soon.’

‘Me an’ you.’

.....

The voices came close now. George raised the gun and listened to the voices.

Lennie begged: ‘Le’s to it now. Le’s get that place now.’

‘Sure, right now. I gotta. We gotta.’ And George raised the gun and steadied it, and he brought the muzzle of it close to the back of Lennie’s head. The hand shook violently, but his face set and his hand steadied. He pulled the trigger. The crash of the shot rolled up the hills and rolled down again. Lennie jarred, and then settled slowly forward to the sand, and he lay without quivering. George shivered and looked at the gun, and then he threw it from him, back up on the bank, near the pile of old ashes.

(Chapter VI, p. 86~p. 87)

それでは、レニーの死は一体何を意味するのであろうか。上記引用からも判るように、それはレニーの死に至るまで、ジョージとレニーが一つの夢を抱いて生きてきたことである。要するに、ジョージは土地への夢を、レニーは生き物への夢を描き、レニーはその夢をしっかりと胸に抱きながら死んでいったのである。そして二人のそれぞれの夢が、男女の場合の愛と違って、おおらかな罪の意識に煩わされない信頼感の強い男同志の友情によって支えられてきたのである。

スタインベックが描く中心人物のほとんどが、何らかの夢と理想像を持ち、ある者はその犠牲者になり、ある者は夢に満足して生きるのである。『エデンの東』のアダムは、スタインベックが描いた夢のもっとも痛ましい犠牲者であろう。ジョージとレニーもまたその例外ではないと思う。『真珠』の主人公キノーと同様に、ジョージは彼自身の夢の中で生きながら悶絶する夢の犠牲者である。夢が永遠の可能性を持っているのは、『赤い小馬』のジョディの場合である。これらは、いずれも作者スタインベックのロマンティズムを示すものであって、この傾向は、初期の作品に多

くみられる。

(5)

さらに、もう一つ見落してならないことは、この作品の三年後に発表された『怒りの葡萄』にも見られるように、当時の社会情勢とカリフォルニアで生活する農民や、日雇い労働者達の生活にも、スタインベックが同情の目を向けていたからにはかならないのである。それが、この作品の中では、主人公ジョージによって代表されている。そして、作者の意図するところを、相棒のレニーとの人間模様を通じて、男同志の友情という絆によって、カリフォルニアの社会情勢とからみあわせて描写し、戯曲的手法によって読者に語りかけたものと思われる。頭が弱くて、幼稚で野獣的なレニーは、彼と対象的な要素を持つジョージに助けられて、人間像をよりいっそう浮き彫りにされ、哀愁をさそわずにはおかないのである。

参 考 文 献

- 1) Text: John Steinbeck. Of Mice and Men: Penguin Books, 1965
- 2) Charlotte Alexander. John Steinbeck's The Grapes of Wrath: Monarch Press, Inc., 1965
- 3) J.C. Pratt. John Steinbeck: Wm. B. Erdmans Publishing Co., 1969
- 4) John Steinbeck. The Grapes of Wrath: Penguin Books In Association With William Heineman Ltd., 1964
- 5) John Steinbeck. The Pearl: Heineman, London, 1967
- 6) 石 一郎『スタインベック』(研究社, 1967)
- 7) 稲沢秀夫『スタインベックの世界』(思潮社, 1978)

[1978年12月稿]

ロレンスと黙示録

アポカリプス

あるいは自然の両義性

山 田 田 津 子

1

アポカリプスは、ロレンスがそれまで己れの両の足をつけて立つてこなければならなかった場所を、もう一度全身で自らに問いなおした書である、といってよい。ほとんどロレンスの肉体が消滅へと向っていた折のことである。この、告別の辞とも、遺書ともとれる作品が重要なのは、一つには、その場所がロレンス文学を支える隠された地底であり、そこからとめどなく汲み出された地下水こそ、ロレンスの全作品をめぐる血液となっているからである。更には、その場所を検証することが、近代ヨーロッパ的知の奥底に巣喰う病根を丸ごとえぐりとうとする作業であり、人間の内側で無意識裡に獲得されてしまっている人知の倨傲に向って刃を振りおろすことになるからである。この刃は両刃である。振りおろそうとする側も切らずにはおかない。これを誰よりも承知していたのは、ロレンスその人

であるということを、われわれは最初に確認しておかねばならない。そうでないと、ロレンスの辿り着いた中枢概念だけを抽出して、単に外在的に論じるといふきわめて空疎なものになりかねないからである。

ロレンスの居た場所とは、頑強なキリスト教的思想の姿態ないしは風土をさす。それは実に二千年の歴史を刻印して形成され、めったなことでは少しも動じることはない。しかし、その姿態を解析するのに、素材として何故ロレンスは黙示録を選んだのであろうか。なぜ福音書ではなく、黙示録なのか？ マシューの、マークの、ルークの、あるいはジョンの福音書のいずれかであつてもよいはずではないか。それともロレンスの選択は、恣意によつてではなく、或るのつびきならない内的必要に裏打ちされていたのであろうか。

たとえば日本の新約学者、田川建三には黙示録は次のようなものとして映る。すなわち、「ヨハネ黙示録の世界は文字通り幻想の世界である。ただし、個人の自由な幻想の世界というのではなく、一つ一つの語句にいたるまで、数世紀にわたる長い黙示文学的伝統の中で決められた約束ごとにしたがつた表現の世界での幻想の展開なのである。内容からみて現代の読者にはピンとこないかもしれないが、表現という水準にのみ着目すれば、イギリスの貴族的なインテリが、言葉づかいはしはしにいたるまで、シエクスピアやミルトンのせりふを（まさにせりふとしてのみ）ふまえてものを言っているのと同じようなインテリの文学作業の世界なのである。」（『批判的主体の形成』）と。なるほど修辞ドクトリナの次元にのみ限つていえば、ダニエル、イジーキアル、ゼカライアなどの黙示文学にあらわれた象徴をふんだんに駆使している。だが、イギリスの現代詩人、T・S・エリオットが、ホーマー以来の文学的伝統のさまざまな要素を掻き集め、それらを互いに反応させ、化学変化を起こさせて全く別な何物かを出現させるところに詩的想像力を見たように、数世紀にわたる伝統的象徴の綾なすピンでとめられた、黙示録の幻想の体質は、果してダニエルの、

イジィーキアルの、ゼカライアのそれと同じであつたのだろうか。少くともロレンスには、黙示録作者（たち）のイメジの貧困にすべてを帰して事足れりとするわけにはいかなかったのである。いうならば、その幻想の体質に、現代人を襲つてやまない愛の不可能性の元凶を、ロレンスは見たのである。

ロレンスは、自覚的であるかないかは別にして、現代人の強いられているΛありよう∨を次のようにいう。

民主的な人間は、結び合いと抗いによって、すなわち、 $\wedge$ 愛 $\vee$ の結び合おうとする力と個の $\wedge$ 自由 $\vee$ の抗おうとする力とによって生きる。もっぱら愛に身をゆだねてしまえば吸い取られてしまふだろう。それこそ個の死である。というのは個は主体を持たなければならない。そうでなければ $\wedge$ 自由 $\vee$ であることも、個であることもかなわぬのだから。それゆえ、われわれが知るのは、われわれの時代が驚きと困惑のうちに証明してきたものとは、個は愛することができないということである。個は愛することができない。これを公理とするがいい。そして現代の男も女も自己を個として以外に把握することはできない。男あるいは女のなかの個は、ついに、自己の内部の愛する人を殺す破目に陥っている。このことは、それぞれが己れの愛するものを殺すということではなく、それぞれが己れの個を主張することによって、自己の内部の愛そうとする人を殺すのである。女が自己の内部の愛そうとする人を殺すように。クライスト者はどうしても愛せない。というのは、愛はクライスト者であるもの、民主的で現代的であるもの、すなわち個を殺すからである。個は愛することができない。個は、愛すると、純粹な個でありえなくなる。だから自己を取りもどし、愛することをやめなければならない。これこそわれわれの時代のもっとも驚くべき教訓の一つである。つまり、個は、クライスト者は、民主的な者は、愛することができないのだ。あるいは、

男が愛するとき、女が愛するとき、男は自己を取りもどさなければならぬし、女は自己を取りもどさなければならぬのである。

わたくし的な、個人的な愛についてはこれぐらいしておく。それなら、おまえとおなじように、おまえの隣人を愛しなさいという（カリスマス）的な、今一つの愛についてはどうか？

それも同じことである。きみの隣人を愛するとする。たちまち、きみはそいつに吸い取られる危険にさらされる。きみは退いて、きみの主体を固守しなければならない。愛は抗いとなる。とどのつまり、愛はすべて抗いであり、愛ではない。これが民主主義の歴史なのである。（二十三章）

この、たたみこむようにくり返えされるロレンスの断定は、人間の自律性と、人間性の自然とが鋭く背立せざるをえないという痛ましいまでの苦渋に射貫かれている。現代に生きるとは、この永遠に和解することのない相克の劇を生きることである。ロレンスは、もしも個が自己を実現させようとするなら、仏陀のように、他人を避け、何人のことも顧みず、ひとりになるほかはない、そうすればあの涅槃にも到達できるかもしれない、という。しかし、それは尋常を越えていて、ほんとうの意味での精神的強者にしかできることではない。ロレンスは、また、この内なる強さを堅持する者を「貴族」^{「アリストクラット」}と呼び、これをジーザスのなかに見出している。奉仕と自己実現に己れを賭す「精神貴族」の宗教、いうならば、「諦観と瞑想と自己認識」の宗教は、純粹に、へひとりゝのためのものである。しかし、尋常な人間はひとりでは生きられない。他人を必要とする。他人との関係のなかでしか生きられないのである。だが、ジーザスは、この他人との関係性については沈黙してしまっている。というか、しかと存在する人間性の、もう

一つのこの局面を、「自分と同じように隣人を愛しなさい」という他人を愛する思想のなかに、解消させてしまっている。だが今日、ひとたび他人を愛するや、主体は侵略され、たがいに般若の相貌を露わにし、食うか食われるかの死闘を演じざるをえない。これこそ、好むと好まざるとにかかわらず、われわれに強いられるまぎれもない現実である。このような事態を、実に二千年という射程において、支え、助長してきたのが、内なる弱さを抱え持つ黙示録作者の、バトモスのジョンだったのである。なにゆえにロレンスが黙示録にかかわらなければならなかったのか、あるいは、なにゆえにその批判的な検証に駆りたてられていったかは、とりもなおさず、ロレンスが右のように考えていたからである。とすれば、ロレンスによって露呈された黙示録の幻想の姿態は、いったい、どのような貌かたちを帯びていたのだろうか？

2

ジーザスの「他を愛する」思想の裏側、すなわち、人間心理の暗部ともいうべき部分を引き受けた黙示録による、原始クライスト教共同体の幻想とはいかなるものか。それについて言及するまえに、私は、ロレンスが、人間の、というよりも、男の自然について、どう考えていたかに触れておかねばならない。

そうなのだ！ 権力はしかと存在する、そしてこれからも存在することに変わりはない。人が二人か三人集るや、とりわけ何事かをしようとすれば、すぐに権力が出現し、一人が指導者となり、師となる。それは避けられるものではない。

このことを受け入れ、人類が過去にしたように、男のなかの自然の力を認め、崇敬を払えば、大きな喜び、ある昂揚感が生じ、勢いある力が、力あるものから力なき者の方へのり移っていく。力の流れというものがあるのだ。こうしてこそ、人々は、いついかなるときも最善の集団的存在を形作れるのだ。そして相呼応する炎が内部に燃えあがる。英雄に崇敬と忠誓を払え。そうすれば君も英雄になれる。これが男の法則だ。おそらく女の法則は別であろう。

〔十三章〕 傍点筆者)

根原的必要、すなわち、男の心のなかにある古きアダム的必要とは、自分のなわばりのなかで、それも自分で獲得できる範囲内で、師となり、主となり、輝かしい存在になることである。雄鶏といえどもそれぞれ自分のたらしめた糞の山の上で鳴き声をあげ、きらめく羽毛をたてることぐらいできるのだ。百姓といえどもそれぞれ、自分の小屋で、少々酔っぱらったときなどは、栄えある小皇帝ツァーになれるだろう。事実どんな百姓もかつての貴族の威光と絢爛、更には皇帝のこの上なき華麗の極みにあった。この上なき師であり、主であり、輝ける存在。自分の目でしかと皇帝ぶりを確かめることもできたというものだ！ 人間の心の奥底にひそむ最も大きく強烈な必要を実現した存在。人間の心は、華麗、絢爛、誇り、尊大、栄光、そして權威を絶対に必要とするのだ。おそらくは愛よりも、少くともパンよりもこうしたものを必要とする。

〔十四章〕 傍点筆者)

男のなかに本来的に備っている力を力として認めようというロレンスの一文は、われわれにギリシャのヘラクレス、ないしはその力強い彫刻さえ想起させる。しかし、ロレンスにあっては、この内なる力の肯定は、同時に権力の肯定である。内なる力に満てる権力を頂点としたハイアラキーに、人間の集団的存在の最善の秩序を見出していることも事実である。ちょうど、人間の可能性の極限を実現した「超人」を頂点として、支配される民衆を考えたニーチェのようである。すでに述べたように、内なる強さ、すなわち、孤独な精神的強者としてジーザスを名辞した「貴族」も、「ジーザスでさえ、他人といっしょになるや、貴族となり、師となる。」という一行から明らかなように、人間の不平等性を、ロレンスは前提としていた。しかし、ロレンスにあっては、権力は「それへの意志」ではなく、欲である。つまりは、男の自然であり、アダムのイブを治め支配する（創世紀、三ノ一六）ように、旧くから、男の内に潜んでいて、決してなくなることはない根原的、必要である。これは、自我などという上等（？）なものではなく、アダムの我執であり、しかも蔽として存在する以上、目を覆うことをせず、すなおに直視することによって、解き放ち、その解き放ちによって、権力の自然的秩序を現出すべきだといっている、と見てよい。

しかしながら、他人との関係性を生きるなかで、このアダムの我執が、挫かれ抑圧され、陰にこもったとき、いったいどのような様相を呈するのか？ これこそ、ローマ帝国によって迫害の憂き目にあい、バトモス島の獄につながれたジョンの物語る「千年王国」であり、いいかえるなら、挫かれねじくれた集団的、謙譲な我執の、謙譲な殉教と見える、究極的権力の実現である。この実現は、むしろのこと、限りなく「延期された運命」である。切に望んでいるものが、あるいは欲しいと思っているものが、どころんでも手に入らないと知ると、人はこれを打ち砕きにかかる。この人間心理の陰険さに支えられ、ジョンの黙示録は、神に選ばれた民の、殉教という衣裳をつけた絶対的権力実現のた

め、燃えるような憎悪とつゝの怨みをこめて、世俗的権力の撲滅、全人類の掃滅、ひいては全世界の潰滅にむけて狼煙をあげ、闘志をむき出しにする。

そして、七つの鉢を持った七人の御使いの一人がきて、わたしと語り、わたしにいった。こちらにきなさい、川水あまたの上に座す、大いなる売女のさばきを、あなたに見せてあげよう。

この女と地の王たちは姦淫を行った。そして地に住む人々は女の姦淫の酒に酔わされていた。

そこでかれは御霊みたまを受けてわたしを荒野に連れていった。すると一人の女が緋色の獣の上に座しているのが見えた、その獣は冒瀆の名の数々に満ち、七つの頭と七つの角があった。

そして女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で飾り、その手に忌まわしき姦淫の穢れに満ちた金の杯を持っていた。

そして女の額には一つの名が書かれていた、奥義、大いなるバビロン、地の淫婦らと忌まわしきものらとの母。

(十七、一一五)

あなたの見た十の角は十人の王たちである。かれらはまだ国を授かってはいない。だが獣とともに、ひととき王としての権力を授けている。

かれらは心をひとつにして獣に権力と力を与えるだろう。

かれらは小羊に戦いをいどむが、小羊はかれらにうち勝つ。なぜなら小羊は主の主、王の王であるから。また小

羊とともに召され、選ばれし、忠実な者も、かれらに打ち勝つ。

(同、十二―十四)

それからもう一人の御使いが力強い声で叫んで言った。大いなるバビロンは倒れた、倒れたのである。そして、悪魔の住処、もろもろの穢れた霊の巢窟、もろもろの汚れた憎むべき鳥の籠となった。

なぜなら民の全てが、女の姦淫に対する怒りの葡萄酒を飲み、地の王どもは女と姦淫を行い、地の商人たちは女の逸楽充溢のために富を肥やしたから。

(十八、二一―三)

女の罪の数々は天にまでとき、神は女の邪悪をおぼえておられた。

女がしたのと同じだけ、また、女の仕業によつては、倍にして返してやれ。女の盛った杯のなかに倍のものを盛りそいでやれ。

女は傲れるまま、贅沢に明けくれたので、それに対して同じだけの苦しみと悲しみを味わせてやれ。というの中心の中でわたしは女王の座にあり、寡婦ではないから、悲しみなど知らないわ、といったのだから。

それゆえ、災いの数々、死と嘆きと飢饉とが一日のうちにやってくる。そして、女は火で焼きつくされてしまふ。女を裁く主なる神は強いからである。

(同、五一―八)

猛き御使の一人が大きな石臼のような石を持ちあげ、海のなかに投げこんでいった、このように大いなる都バビロンは激しく打ち倒され、二度とふたたび姿を現わすことはない、と。

(同、二十一)

どう見ても散文詩としては、というか、文学としては一流ではない。だが、底深く怨嗟の声を響かせたこの攻撃的情念は、なんと熾烈なことか！ 実際、読むごとに、震えが軀を刺し貫かずにはいないほどである。目には目を、毒には倍の毒を、といった具合に、増幅しつつ地滑りしてゆく復讐への執念は、女を火で焼きつくさなくては気がすまない。そればかりか、

なお見ていると、獣と地の王たちとその軍勢とが集り、馬に乗っておられる人とその軍勢とに対して闘いを挑んだ。

ところが獣は捕えられ、獣とともに偽予言者も捕えられた。かれは獣のまえで奇跡を行い、それによって、獣の刻印を受け獣の像を礼拝した者たちを惑わしたのである。この両者とも、生きながら、硫黄の燃える火の池に投げこまれた。

残りの者は、馬に乗っておられる人の口から突き出た剣で切り殺され、その肉を全ての鳥たちがむさぼり食った。

(十九、十九—二十一、傍点筆者)

淫婦に乗せた獣も、偽予言者も、つまりは集团的我執(選ばれた聖徒たちの千年支配)の実現にとって邪魔なもの

はすべてなぎ倒さなければならぬのである。しかしこのなぎ倒し方が問題である。生きながらにして硫黄の焰火の只中へ投げこもうというのであるから。しかも、その目的は、ただ獣や人間のてんぶらを一瞬にして拵えようというのではなく、そこから、「世々限りなく、日夜」途絶えることのない苦悶の呻吟が洩れ出る（二〇、一〇）のを聞きとどけようというのである。それはまた、馬上の人（救い主である人の子）の剣で切り殺すだけではおさまらず、その死肉を鳥の嘴でむさぼり、つつかせようというのと呼応している。

この、世界を終末へと向かわせる地獄絵図のむごたしさは、たとえば、神学者、チャールズがいうように、大淫婦がローマであり、獣がネロであり、皇帝たちであるとして、パトモスのジョンを含む原始クライスト教徒に対する大帝國ローマの迫害の、単に、物棲さのみを物語るものであろうか。おそらくそうではあるまい。この執拗な破壊衝動の陰惨さこそは、ほかならぬ、かれらの権力への渴望の大きさを証左するものであろう。と同時に、それを断たれ、内向させねばならなかった者の社会的、ないしは階級的インフエリオリティ・コンプレックスが、負の攻撃的パネに転化するとき、極度のサディズムを奔流させるという構図を物語っているのだ。これは人間心理の、あの黒々とした病理と他なるものではない。だが、聖徒による千年支配、更には硫黄の火の池のみを残し、全世界を潰滅させ、「歴史の消滅」（ブルトマン）をはかつて建設する聖都ジャールサラムの幻想が、聖徒に課すこの世の忍耐、すなわち殉教の忍耐は、実は、右に述べてきたようなサディズムの快楽によって支えられていた、というべきであらう。いいかえるなら、「聖徒の共同体のみを権力の究極的否定として、しかも究極的権力」（「四章」）として樹立させるといふ思想は、サディズムの快楽に裏打ちされた忍耐によって、ゆるぎないものとなったのである。ここに集団的我執が、人間性の自然を裏がえし歪曲させつつ、観念の絶対性を獲得していったへからくりVが隠されていた、といつてよい。

默示録にあらわれた原始クライスト教共同体の幻想とは、すでに見てきたように、倒錯した権力思考であり、その姿態は、まさしく、慙懣と見えて陰惨なるもの、に満ちた生命否定以外のいかなる貌も帯びていない、ということ、は、もはや明らかであろう。

しかし、ロレンスは、この幻想が今なお、たとえばイギリス北中部地方の坑夫たちの間に根強く生きている、という。坑夫たちは、それぞれ、自ら仮想する敵に向けて、大淫婦への「大がかりな告発」を朗唱し、興奮のうちに共振れしている、という。己れの敵を、地獄のなかへ、あるいは、硫黄のただなかへ突き落とし、永遠の苦患にさらしつつ、自分たちだけは、まるで「最下層の犬が最上層の犬に成り上ろう」とするごとく、絢爛たる栄光の座につこうとする者にとって、これほど恰好の幻想はないというわけだ。ロレンスは、しかし、これに向けて、腹の底から嫌悪を吐き出し、憤りをたたきつける。なぜなら、この共同体の幻想と、完全に生きようとする個とは逆立せざるをえない、ということを目に透視したからにはほかならない。すなわち、クライスト者たろうとすれば、愛することはできない。愛そうとすれば、クライスト者たりえない、という逆立構造をである。

しかし、ここでわれわれが注意しておかなければならないのは、ロレンスの憤りを単的に捉えてはならない、ということである。いうならば、この幻想が自己にとって他なるものであると気づいたときには、すでに個の内部の隅々にまで浸透していたという事実をぬきにして、この種の憤りはありえないからである。また、共同体の幻想は、暗黙のうちに個を呪縛し、その默契から自立することは、おそらく掟を破ること以上に、勇氣とエネルギーを必要とする。なぜなら、単に村八分に処せられるだけで事は済まず、単独者としてすさまじい精神の劇を生きつづけなければならぬからである。

ロレンスもまた、この例外ではありえない。イギリスからの追放人として、ヨーロッパを放浪しなければならなかったばかりでなく、この幻想の無言の圧力に抗いつつ、それが、まさしく二千年をかけて排除してきたものを、もう一度、人間の側にとりもどすための血路を見出さなければならなかったのである。一体、どのような？

3

ロレンスは、クライスト教的恐れを憎まざるをえない、という。その手立てというのが「もとより、己れにあわな
いものはことごとく、否定すること、更には、それを抑圧すること」であつたからだ、という。そして、「あらゆる
異教的形跡を抑圧しようとするその構造は、一世紀から今日にいたるまで、クライスト教世界にあつては、本能的、
というか、恐れ本能であつて、徹底をきわめ、実に犯罪的であつた。」と告発している。抑圧の根拠律に恐れを讀ん
だことは、まさに、ロレンスの炯眼というほかないが、実は、この恐れこそ、幻想を、いいかえるなら、観念をゆる
ぎなきものとするための強力な武器であつた、といえるのだ。恐れの対象は、願望の対象でもある。そして、願望の
対象によつては、一旦、その魅力の囚となるや、とことん身を焦がしかねない。つまりは、自分の内側から、己れを
焦土と化してしまふのだ。だが、このことをいち早く嗅ぎつけることができるのは、内に恐れを隠し持つてしまつて
いる者に限られる。これを能力と呼んだものかどうかかわからないが、いうならば、この嗅覚ともいふべきものが、前
以つて、その対象を禁制のなかに封じこめるか、あるいは、それに対して闘いをしかけるのである。

ところで、バトモスのジョンは、きわめて巧妙な煽動的思想家と私に映るのだが、ロレンスは、人内なる弱さVを
抱え持つ男であるという。これは、しかし、一枚の銀貨の表裏であるようだ。おそらく、バトモスのジョンは、右に

述べてきたような恐れを、誰にもまして奥の方に潜ませていた、と推測される。

たとえば、すでに触れた大淫婦や獣の隠喩のなかに、この構造が匿されている。チャールズのように、淫婦を火で焼きつくし、獣を硫黄の燃えさかる焰の池（このイメージだけはダニエル書などからの剽窃ではなく、バトモスのジョンの発明である）のなかに投げこんで消滅させたのは、単に物質的栄華を誇る異教のローマや、ネロや王たちであつただろうか。そればかりとはいえない。ここで用意周到に封印されているのは、ほかでもない、人間の内部のただの自然である。なぜなら、淫婦とは女の夜の自然であり、獣とは男の自然であるからだ。おそらく、バトモスのジョンは、その研ぎ澄まされた嗅覚で、共同体の幻想（集団的我執の完遂）を足元から突き崩すのは人間性の自然であることを察知し、これを「汝」なかれの禁制のなかに閉じこめようとしたのであろう。それでもなお恐れは消えず、これに対しても闘い、をしかけ、徹底した掃滅をもくろんだものと思われる。

このように見えてくると、ジョンの黙示録が全篇にわたって、流血の闘争、血に染った騎士の衣、殺戮、馬の轡にとどくかと思われる血の海、などが氾濫していたとしても不思議はない。また、メサイアである人の子は、もろもろの王の王、小羊、実は怒る獅子、そして剣を閃めかし、あらゆる戦いにうち勝つ征服者でなければならなかったのである。

そして、わたしに語りかける声を見いだそうとして、ふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が見えた。

七つの燭台のあいだに人の子のような者が見えた。足もとまでたれ下る法衣をまとい、胸に金の帯をしめていた。

かれの頭と髪かみの毛は羊毛のように白く、雪のように白かった。かれの眼まなこは火の焰ほののようだった。

かれの足は、輝くしんちゆうのようで、まるで炉ろのなかで燃えているようだった。かれの声はあまたの水の音に似ていた。

そして右の手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が突き出ており、かれの顔は力強く照り輝く太陽のようだった。

わたしはそれを見たとき、死人のようにかれの足下にくずおれた。すると、かれはわたしの上に右手をおいて、わたしにいった。恐おそれるな、わたしは最初であり、最後である。

(一、十二—十七 傍点筆者)

ここに描かれているのは、実に奇怪で異様なジーザスである。イジーキアルやダニアルの模倣だとはいえ、パトモスのジョンの恐れを解決してくれ、しかも、集团的我執実現のために、絶大な破壊力を振ってくれる、力強く、頼もしいメサイアである。

これこそ、今日、俗人、というか、常人の仰ぐジーザスである、とロレンスはいう。そして、生命を、更には生命の活力まで排除し、抹殺してきた自閉的精神の根源であることに怒りの嘆息を洩らす。だが、ロレンスには、このジーザスを透徹して否定することはできなかったのである。これはロレンスを考察する場合に、決して見逃がしてはならない重要な一点である。いうならば、ロレンスは、このジーザスとわれわれのうちに躍動する生命とを和解させねばならなかったのである。そのためには、逆に黙示録の、力に溢れたジーザスでなければならなかった。ロレンスは、

パトモスのジョンを逆手どることで、自らの黙示録を書いた、といつてよい。

ガリラヤ湖のほとりをさまようジーザス、あるいは、「わたしは大変悲しくて、死ぬほどである。君たちも此処にとどまって、わたしと一緒に目を覚ましていてくれ。」(マシュー、二六、三八) というジーザスとは程遠い「雲に乗ってやってこられる」黙示録のジーザスに、ロレンスは何を見たのか？

それは、ほかでもない、壮大なコスモスの主、宇宙の支配者、宇宙の運行者としてのジーザスである。七つの燭台、すなわち太陽と月と五つの惑星のあいだに立ち、右手に北斗七星と呼ばれる大熊座の七つの星を掴み、北極星を中心にそれらを回転させて、全ユニバースの運行を司どる主としてのジーザスである。その顔は、力に溢れた太陽のごとく、命の根源そのもののように、まさしく仰ぎ見る者をくずおれさすほど、眩しく輝いているのだ！ 口から突き出る両刃の剣、それは強力な武器としての言葉であり、ロゴスであり、知である。この剣の片刃は、我執ゆえに、あるいは恐れゆえに、人間性の自然を人汝一なかれVの禁制のなかに閉じこめ歪曲させつつ、ついには、殉教という名の八偏執狂的な生命破壊Vにいたる思想の聖堂、いうならば知の絶対性を築くため、パトモスのジョンに荷担したのではなかったか。これこそ「破壊の竜」にはかならない、と。

だが、剣のもう一方の刃、これをロレンスは、パトモスのジョンを逆手どるテコの支点にしたのである。すなわち、ほとんど神経症的ともいえる恐れではなく、あのアナクシマンドロスの、天体の輪を廻す宇宙の支配者、無限の生命力とその潜勢力に溢れて、妖しく燃える日輪のごとき人の子、ジーザスへの畏れに。この畏れをとりもどすとき、はじめて、ほんとうにコスモスの、生命的なるものの授与者と享受者、いわば、支配、被支配の関係が成立し、たがいの交感さえ可能となる。そのとき、「破壊の竜」を、「獅子のごとき生命の、限りなき豊かさ」に転化させるこ

とができるのだ、と。

しかし、今日なお、黙示録的知の破壊の竜は、衰えるどころか猛威をふるい、ほとんどそのとどまるところを知らない。

しかも女ほど痛烈に古き知グロウズのとぐろに巻かれているものはない。これは終始かわらない。かつては靈感のいぶきであったものが、しまいには固定され、悪い形となり、今ではミイラの包帯のようにわれわれをぐるぐるまきにしている。しかも女は男よりも更にきつく巻かれている。今日、女の一番いいところはこの知グロウズのとぐろにきつく固く縛られており、肉体を喪い、抽象的になり、見るも恐ろしい自己決定に迫られていたでられている。今日、女は奇異な《精神的》生物であり、古き知グロウズの邪惡な惡魔に追いまくられ、一瞬たりとも、それから逃れて自分にかえることを許されない。邪惡な知グロウズはいう、あなたは《有意義で》なければならぬんだよ。生きているあいだに何か《価値あるもの》を拵えなきゃいけないんだよ。そこで女はいちずになつて、何か価値あるものを拵え、邪惡な形をしたわれわれの文明をますます高く積みあげ、一秒たりとも、そこから逃れて、新しい緑なす竜の、光り輝く流動的なとぐろに巻かれようとするのである。

〔十六章〕

この解き放つと見えて失われていくものを今こそ直視しなければいけない、とロレンスはいいたいのだ。だが、近代的自我は、これが破壊の竜であることに気づこうとしないで、ますます高くバベルの塔を築こうと惡戦苦闘してい

る。パトモスのジョンしながら、ロレンスはこの知の倨傲に、全身で呪詛をあびせつつ、燃える日輪の太陽的生命との交感によって、われわれの内なる自然、「光り輝く流動的」な竜の潜勢力^{ポテンシャル}を復権させるのだ、と叫びを発する。そうしてこそ、きれぎれに引き裂かれた個がもう一度、全体性をとりもどすことができるのだ、と。

しかしながら、ロレンスの大いなる日輪、大いなる宇宙への畏れと帰依は、生命を、あるいはわれわれの内なる自然を、ただの生命、ただの自然として見ることでおさまらず、大文字の生命、あるいは、大文字の自然という絶対認識にまでおし上げずにはいられなかった。ロレンスといえども、ついに、クライスト教の父性原理から脱出することはできなかった、といってよい。反宗教も、最終的には、宗教のなかにくみこまれていく。ここに、私は、逆の一つのヨーロッパ的知の宿命を見ざるをえないのである。

註 聖書のテキストは、英語版の「欽定訳」と、「モファット訳」を併用した。ロレンスは引用には「モファット訳」を使用している

が、本文中の引用は「欽定訳」からの筆者の試訳である。日本語の聖書も参照したが、試訳には、ところどころ、「モファット訳」の解釈を加味したところもある。ロレンスのテキストは、D.H. Lawrence, *Apocalypse with an introduction by Richard Aldington*. Penguin Books. を使用。なお、ジョンの黙示録については、R.H. Charles, D. Lit., D.D. *The International Critical Commentary on the Revelation of St. John*. Edinburgh: T. & T. Clark, 1920. Two Volumes. を参照。

なお、Rudolf Bultmann, *History and Eschatology*. Edinburgh at the University Press, 1975. は私のややかな思考を助けてくれた。

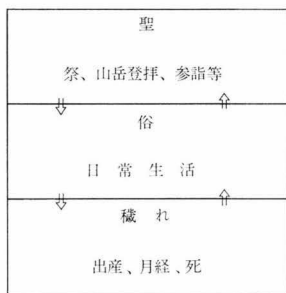
隠れキリシタンにおける穢れの観念について

紙 谷 威 広

(1) 穢れと民間宗教者

民間信仰において、種々の穢れの観念が表現されている。死や出産にともなう不浄や、年中行事等にも関連する災厄の観念といったものもある。これに対して、穢れからの解放のために種々の儀礼や禁忌が創出されるのである。山岳登拝を行なう修行者や参詣者は日常生活からの離脱に際して、一定期間の精進の生活を送った後に、山岳登拝に出發するのである。埼玉県比企郡幾川村大野では、大山講に出發する前に、男だけでお精進堂に籠って生活するのである。その間、女性の料理したものは食べられず、野菜などを持ち寄って、自分達で調理するのである。また、川に下って、しめを張った場所で、身を潔める。代参者には、他の人々が「大山石尊大権現」と言いながら、水をかけるのである。⁽¹⁾このお精進の場合、二種類の要素が含まれているようである。すなわち、(一)、女性の穢れからの離脱、(二)、日常生活からの離脱である。ことに水による潔めと、男性のみによる集団生活によって、以上の点が明らかに表

図① 聖・俗・穢れの構成



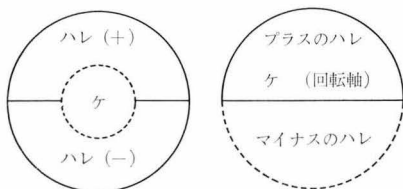
現されるのである。

祭礼での禁忌もまた、穢れの観念を表現するものとして、特徴的である。死者の出た家は祭礼の役割をつとめることは許されないし、また祭礼の席への出席も認められないことが多い。千葉県成田市上福田のオビシヤは、輪番当屋制の祭礼であるが、当屋になった場合には、その当屋は清浄でなければならない。死者が出た場合には、安置してある神の宮を、次の家に移す必要があるとされているのである。これは、死の穢れが、神を汚すことになるかとされるからである。また一方で、出産や女性の月経も不浄視されることが多かった。長野県下伊那

郡大鹿村では、ヒマヤと呼ばれる小屋が各家に用意されていて、月経の女性はこのヒマヤに籠って生活するのである。月経の後に、ヒマヤ沢などと称される川や、井戸などで水垢離をとってから帰宅するのであり、日常生活への復帰のためには、精進潔斎が要求されていたのである。また、出産にも不浄観があり、出産後の一定期間は、神棚に白紙を張って隠す習俗や、神への供物に手を触れないといった事例も見られるのであって、一般に強調されてきたものである。

これらの穢れの観念は、次のように図示することができる(図①)。つまり、日常生活を基準にして考えると、この日常生活よりもマイナスの状況としての、出産、月経、死といった穢れの状態がある。これに対して、さらに、日常生活そのものをマイナスの状況とするところの、より上位の聖なる状態が存在する。つまり、山岳登拝行に見られ

図2. 桜井徳太郎氏、ハレの構造
「結衆の原点」より



るような神聖な状況というプラスの位相があると言えよう。この三分類は、波平恵美子氏や桜井徳太郎氏によって、ハレ・ケ・ケガレの構造として、定式化された。桜井徳太郎氏によれば、ハレにはプラスのハレとマイナスのハレがあつて、ケの軸を中心にして、百八十度転回すれば、重なり合うものとされたのである(図②)⁽³⁾。これらの転換する状況についての桜井氏の指摘は、日常態としてのケは、エネルギーを発散するので、ケガレの状況に落ち、ケの活力を回復補強するハレの儀礼が催されるところなのである。確かに、桜井氏の指摘の通り、ケガレとはケの活力の衰退であるのかも知れないが、それだけでは説明できないし、また、日常生活そのものをケガレの状況と

考えて、否定的にとらえる観念もあり、日常生活のケガレを、精進潔斎で清浄にするといった行動形態や宗教、民間信仰も存在するのである。前述した、山岳登拝行もこの例と見ることができるのであり、集落構成員の代表者としての山岳登拝行が、輪番神主の宗教行動であつて、それだけに日常生活を否定する必要が存在するのである。こういった、ケガレに対する観念を、五島列島のキリシタン、ことに役職者の中に見出すことができるのである。これに対して、生月島のキリシタンにおいては、穢れの観念は明確ではない⁽⁴⁾。これらの穢れの観念を、隠れキリシタンの中に、見出してみたいのである。ことに、役職者が穢れを拒否する意義を、民間信仰の中に位置づけて理解するのが本稿の目的である。

(2) そとめ 外海、五島キリシタンの「悪^{わる}か日」

五島列島のキリシタンは、古帳・元帳あるいは、帳内といった名称で、自己の集団を呼んでいる。帳とは、彼等が保持するところの日繰り（教会暦）のことであり、日繰りにしたがって、祝祭日を決定し、帳を保持している帳方を中心に集団が維持されているのである。日繰りはバステヤンと称する人物によって、繰り方が伝えられたとされ、多くは記号によって記録されている。帳方は、この帳によって「悪か日」を繰り出して、帳内に連絡するのである。悪か日は、障りのある日の意味であって、仕事をしてはならない日とされている。殊に「コエハイ」を使つてはならないものとされていて、肥料に触れてはならないし、また灰で種を蒔いてはならないのである。

片岡弥吉によれば、帳方は毎日曜日とその週の障りのある日を、暦から繰り出して知らせるのである。本来、帳内の者が帳方の家に集まり、オラシヨや届けをしたあと、帳方がその週の、障りの日を繰り出して知らせるのであった。近年は集まりが少ないので、家の戸口に黒板をさげて、曜日と障りのある日を記して知らせるのだという。⁽⁵⁾

障りの日Ⅱ悪か日には、コエハイとか針仕事をやってはいけないことになっていたとされる。日曜日が大体、悪か日であると、奈留島の松山では伝えている。肥灰を使うことを嫌い、女の場合には、針仕事やのりつけを避けるのである。肥は身から出たものだから嫌うのだとされている。昔の人が休むように考えたものだというのである。どうしても、仕事をしなければならぬときには、クーカイをして、祈りを唱えるのだとされる。⁽⁶⁾片岡弥吉によれば、障りの日に禁じられている仕事をしたときは、ご後悔をしなければならぬとされ、「過ちのお届け」をする⁽⁸⁾とされている。⁽⁷⁾日曜には、役職者（帳方、水方、宿老Ⅱ三役と呼ぶ）以外の者も肥灰を扱ってはいけないとされるのである。

日曜日を中心とした仕事の禁忌は、以上のような、①肥料を扱うこと、②灰を扱うこと、③種を播くこと、④海藻取りである。また女性の仕事として禁止されているのが、⑤針仕事、⑥のりつけであって、この他にも⑦藁を打

つのも嫌うとされているのである。これらの禁忌は、次のような理由が付されている。すなわち、前述の通り肥料を扱うことは、身から出たものであるから、嫌うのである。

ところで、日曜日以外にも、悪か日は多かった。お帳の中に○印のついている日があつて、この日がワルカ日になつているというのである。⁽¹⁰⁾ 聖人達の命日などの日には、ダゴエを扱わないとか、針仕事をしない。⁽¹¹⁾ また、アナタサマ（神々天主）の名前の出た日は、肥灰は使わない。⁽¹²⁾ こういった伝承があり、さらに、お帳で「御」のついた日は「悪か日」になるともされているのである。⁽¹³⁾ そして、この針仕事の禁忌を破ることは、「アナタサマに、針をたつることになる」。つまり、針を神の身に立てることを意味するからしないというのである。⁽¹⁴⁾ 多くの祝祭日が（聖人の記念などの）、仕事を休む日として意識され、禁忌を犯すことは、神への冒瀆として考えられていたのである。これらの祝日の内、ある帳方の記録に残され、理解しているものを列記してみよう。⁽¹⁵⁾

二月 二六日 御つげの中日

三月 八日 かなしみの上り

五月 九日 さからべんとう様

五月 一八日 さんぢれん様

六月 五日 御七人様

七月 一日 雪のさんた丸や様

九月 三〇日 もろもろの人ばいと日

一〇月 一日 とむらい日

一月 二日 御かいさん日

一月二五日 御たん生、しも月の入

これらの祝祭日の名称は、その音の転訛と意味の忘却という理由から、本来の教会暦からはるかに逸脱してしまっているのであるが、ともかく、仕事の禁忌という形式で伝承されてきているのである。

以上に見てきた、障りの日、悪か日は、カトリックで現在も行なわれる日曜及び大祝日にあたるのである。この悪か日の伝承について、一オラシヨ本中に、次の文章がある。

ドミニカ ト ダイナル イワイビノ コト

ドミニカノヒハ、アニマニクシン ノ タスカルタメ、ツトメヲナスコト、タダシ、コノヒハ、ヒルヨリ、カセギ ニツクコト、ゴバスクワト、スピリトサントノ、アマクダリト、ヨンアルチノ、ゴタンジヨト、サンタ丸ヤノゴ上天、コノ四カニチハ、アサカラバンマデ、ツトメヲササゲタテマツリ、サンカイノカセギ、ユルシナシ、カナラズマモルベシ

というのである。田北耕也は、これを次のように現代語に訳している。すなわち、

「日曜日は靈魂、肉身の救いのため、祈りを為すこと、但し此日は昼より稼ぎにつくこと。復活祭と聖靈降臨と主の御誕生と聖母マリヤの被昇天、この四日は朝から晩まで祈りを捧げ奉り、山海の稼ぎの許可なし、必ず守るべし」

とするのである。⁽¹⁶⁾したがって、これは、キリスト教（カトリック）の安息日の思想が、そのまま伝えられたものと考ええることができる。田北耕也は、このオラシヨ本の記述を、祝日の守り方を過誤なく伝承してきた証拠としてあげて

いるのである。⁽¹⁷⁾しかしながら、この資料が、復活信者の手になるものであり、書かれたのが大正九年であるから、カトリック教会の再布教以後のものであって、再布教による影響がないとは言えないのである。仕事の禁忌が、安息日の伝承であるというには、不十分な論拠ではないだろうか。むしろ、ここでは、仕事の禁忌を、悪か日とした意識をとりあげることが必要であると思われるのである。

肥灰の禁忌を、二つの側面からとりあげてみたい。すなわち、(一)肥灰を不浄とする意識、(二)仕事の禁忌の行なわれる日⁽¹⁸⁾悪か日とする意識の二点である。本来、祝祭日・日曜といった日は、神に捧げられた日であり、神聖な日とすべきものである。しかしながら、潜伏した、隠れキリシタンにとっては、この祝祭日や日曜は、仕事をしては悪か日として、認識されたのである。他の週日や、祝祭日以外の日は、仕事をして良い日⁽¹⁹⁾良か日となるのである。したがって、本来の祝祭日としての意義が不明確なものとなるに⁽¹⁸⁾したがって、良か日、悪か日という側面、すなわち仕事の禁忌こそが強調される結果となったのである。潜伏のための便宜的な制度が、定着していったのである。そのため、仕事の内容についても、肥灰、針仕事という代表的なものが強調されてきたのである。肥は、肥料を使うことや、下肥を汲むことなどで、一般に穢れた仕事とされる。祭の当屋をつとめる、年番神主などが、肥料に触れたりしないという禁忌もまたよく見られるところである。また灰⁽¹⁸⁾種時も神聖な、祭の日などにはしてはならないとする地方も少なくないのである。また、針の使用についても、金物を嫌うという伝承がしばしば見られるので、これも日本の信仰、禁忌に由来していると言えるのである。⁽¹⁸⁾したがって、仕事の禁忌は安息日の定着という可能性もあるが、むしろ、民間信仰に由来し、安息日によって確立されたとすべきではないだろうか。⁽¹⁹⁾

ところで、仕事⁽¹⁹⁾日常生活を穢れとする思考については、さらに強調されねばならないであろう。そこで、前述し

た資料（伝承）の中で、(一)祝祭日の針仕事はアナタサマに針をたてることになること、(二)肥は身から出たものであるから穢れていることの二点が重要なものと考えられる。すなわち、(一)はこれまで述べてきた、安息日の定着したものとすることができるであろう。しかし、それと同時に針仕事が多、もつとも日常的であり、欠かせない仕事であったことも想起されなければならない。すなわち、日常的な営みを捨て去ることこそ重要であったとも言えよう。そのことは、さらに(二)の点で強調されているのである。肥は、作物の育成にとって、必要なものである。したがって、現世的な価値からは、これを欠くことはできない。しかし、肉身の救かりではなく、アニマ（靈魂）の救かりを求めているところのキリシタンにとっては、身から出るところの穢れに触れることを捨て去って、穢れを離れることが優先したのである。

これらの点からすれば、外海地方や五島列島のキリシタンにとっては、日常生活の中での重要な部分をしめている、農作業の肥料を扱うことや、灰（種蒔）をすること、及び針仕事などは、穢れたこととされ、帳方の指摘する、悪か日には、これらの仕事を避けて、身を慎しむ必要があったのである。そして、この穢れを避けることが、アニマ（靈魂）の救いに必要とされたのである。しかし、これらの穢れの観念は、カトリシズム本来のものとするよりも、日本の民間信仰との習合の上になるというべきものである。

ところで、悪か日には肉を食べてはならないとする伝承もまた、知られている。ことに復活祭前の四旬節を、悲しみと呼んでいる。四旬節の始まりが、悲しみの入りであって、復活祭が悲しみの上がりと呼ばれるのである。この期間、肉を食べてはならないとされている。また、奈留町の松山では、餅も卵も食わずに、身を慎しむものとされているのである。この由来を、奈留町の矢神では、次のように伝えている。

「デオスさまはカルワリヨ嶽で往生されたが、パブロが山に一度逃げた。この時罪人どもがいろいろ工夫して岡綱を立てて捕えようとした。そのとき猪や鳥に化けて逃れた（それで肉は「悪か日」には食べてならないのである）。」（中略）

「悲しみのうちは肉類や卵を食べることを禁ぜられている。拷問にかけられている四〇数日間には餅など搗かせなかった。悲しみの中には御神酒を供えて「昼御歌」のお経をあげる。」
復活祭には、魚を供え、鶏や卵でさえも食べるのである。⁽²⁰⁾

カトリックの教義が、誤り少なく伝えられた事例と言えよう。しかし、それと同時に、これらの伝承が由来を語るものとされ、禁忌の理由を説明することとなっているのは、日本的な定着の結果と見ることができるのである。悪か日の意義とともに注目すべき点である。

(3) 五島キリシタンの役職者と穢れ

悪か日の内、日曜日については、全てのキリシタンが守るべきものとされていたが、その他の祝祭日については、必ずしも全員が守らねばならないものとはされていないようである。多くの祝祭日に、肥や灰を扱わないのは、三役、すなわち帳方・水方・宿老といった名称で呼ばれる三人の役職者たちであった。⁽²¹⁾本来全員が守っていたのであるが、仕事を休むことができないので、次第に、役職者のみに限定されてきたのであろう。したがって、現在では、悪か日を厳密に守ろうとする者は減少しているのである。その中で、役職者は悪か日を守らざるを得ない者と認識されている。それは、役職者が、サズケ（洗礼）や葬送儀礼の執行者であって、神聖な役割を担っているからに他なら

ないのである。また、役職者は信仰上の指導者であり、司祭者でもある。帳方の家を中心として、悪か日の儀礼が行なわれるのである。

奈留町の松山では、正月元旦がハツハギといって、生きた(生きているの意)人が無事を祈る願立ての行事がある。大晦日、歳の晩は願ぼとき(願をほとく)といって、帳方に集まったのである。⁽²²⁾すなわち、祈年の行事でさえも、帳方を中心として行なわれたのである。また、役職者は祈禱の能力を有する者とされていたようである。外海の東樫山のオラシヨには、次の一文がある。

「そこ立のけ 大天狗 此物はでうす様の御みことばを以てとふるぞ あめんぜすす」

という「まはらい(魔はらい)」の祈禱である。また、「天狗しき」と称するものも、これと同様の文章である。⁽²²⁾奈留町の松山では、天狗しきは、座についたとき(帳方の集まりのときの座)に座を清めるための経文とされている。これを唱えるのも役職者であり、ことに、帳方の役割となっているのである。

また、種々のまじないのオラシヨも伝えられてきた。

ヤケドノマジナイ

シモバシラ、コーリノハリニユキノケタ、アラレノタルキツユノフキダサ

タンノマジナイ

東山コーサガタニノ、タンカズラ、ネヲキッテハヨカラス、ハヨキッテネヲカラスアンメン上ス

唱える呪文は、意味も明確でないが、こういった、病気の治療なども職分と考えられていたのである。したがって、これらの呪文を記憶している必要があったのである。帳方・水方はまた、新しい家や舟に魂を入れる祈禱も行ない、

四つ祝といった子供の成長の祝さえも行なうのである。また、雨乞いの共同祈願の呪文もある。⁽²⁵⁾

以上見てきた如く、三役と呼ばれる役職者は、キリシタンの生活全体についての宗教的役割を担っていたわけである。それだけに、役職者は、身の穢れに注意しなければならなかった。ことに、サズケ（洗礼）は、葬送儀礼とともに、アニメ（靈魂）の救いのために最も重要視されてきたのであり、身の穢れを除くことが要求された。

サズケは角^{つが}欠ぎとも言つて、神仏にかかわらず、女の胎内から生まれて、洗わずに、そのままにしておく、鬼と一緒に角がはえているので、角を落とすのだと言っている。⁽²⁶⁾したがって、人間としての生命を得るために、必要なことであり、それだけに重視されたのである。⁽²⁷⁾サズケを行なうにあたっては、帳方水方とダキオヤ（子を抱いて、サズケを受けさせる）は、サズケの行なわれる日の朝に、身体を淨めるために風呂に入る。風呂に入った後は、小便をしてもいけないので、できるだけ早く、サズケを始めなければならないとされている。サズケをしてから一週間は、下肥も使えなくなる。⁽²⁸⁾また、ガラツサというオラシヨを毎日、一七遍唱えるのである。

福江市観音平では、風呂に入ると、ござを敷いて、ござの上に清潔な身体のまま上り、特別に、サズケなどの儀式のときに使う着物を着るのである。以前は羽織を着たのである。また、ダゴエには触れず、肉類、鶏肉、卵は食べなくてはならないし、女性にも触れないと言うのである。⁽²⁹⁾

したがって、サズケを行なう、帳方や水方の役職者は、そのために穢れを払い、サズケを終えた後、一週間というものは、穢れたものに触れてはならないとされたのである。穢れに触れることは、サズケの効果を失わせるものになるのである。ともかくも、一切の穢れから、一週間は遠ざかるのであり、したがって、前項で論じたように、日常生活の穢れ、言いかえれば、穢れのある日常生活から離れて生活しなければならないのである。

ところで、ここで考えられている、穢れは前項で論じた穢れと同様の肥料、肉食と、それに加えて、女性に触れることとなっている。身から出る穢れは、ここでも忌避されるのであって、サズケを受ける子どもが小便をするのも避けるのである。また、肉食も嫌われるのである。これに加えて、女性に触れることの禁忌が存在するのであって、宗教的役割を果たす者の特徴となっているのではないだろうか。

ここで注目しておきたいのは、これらの役割を果たす、役職者がサズケにあたって、清浄な存在として、種々の穢れを浄めなければならないことである。さらに、これらの役職者は、その他の種々の機会においても、穢れを払うことが要求されていることである。

隠れキリシタンの集団の衰退とともに、穢れの意識は薄れてきている。ことに、一般の信者は、役職者に穢れを払う役割を依頼しているように思われるのである。隠れキリシタンの場合、産と死の穢れはさして意識されない。それは、隠れキリシタンの信仰の中で、サズケと葬送儀礼が重要な位置にあるからと云えるであろう。役職者の穢れも、日常生活に起因するものであって、その穢れを除きさえすればよいのである。したがって、これらの点から、隠れキリシタンの役職者は、その役割の故に、日常生活の穢れを捨て、精進潔斎することが求められていたのである。精進を代行するものとして、尊崇されてきたとも言えるのである。

(4) 生月いきつきのキリシタンと穢れ

生月の隠れキリシタンは、五島のキリシタンのような日繰りを有しない。キリシタンの組織の中心となっているのが、「ツモト」と呼ばれる家で、納戸神と称して、聖像・聖画・諸信仰具を保持し、守っているのである。かつては、

納戸にこっそりと秘しておいて、外にもらすことはなかった。また、洗礼を受ける「授け役」があつて、こちらも人々に洗礼を受ける他に、種々の行事に参加し、指導者としての役割を果たすものであつた。日練りがないので、クリシタンの諸行事は、年中行事化が進んでいて、五島のクリシタンのように帳方によつて繰り出すといったことも行なわれない。しかし、重要な祝祭日については、土用中のキキ合せと称して、各ツモトが輪番でヤドをつとめて、会合を開き、日どりを決定する。生月のクリシタンは、各触ふれ（部落）毎に、「授け役」があり、その下に「つもと」が統轄されている。「つもと」は固定している場合もあれば、神とともに移動する場合もある。このつもとの下に、コンバンヤ（小組）があり、組頭を「み弟子」と称するのである。この「授け役」「つもと」「み弟子」が、クリシタンの組織の基本をなしているのである。⁽³⁰⁾

これらの役職者が集まる機会はさして多くはない。四月の中頃、六カ所寄りと称して、授け役、つもと、み弟子などが全員集まり、ヤドをとつて、「野立ち」と称して、水の出る場所や三又路で、お守りを切り、サンジュワン様の水をかける。また、大豆を黒くいつて、納めるのである。これは、けがなどしやすい、三又路のような場所や、腹あたりになりやすい、水のある場所を対象として行なうものなのである。厄払いや清めのための行事と考えることもできるものであり、こういった、呪術的な能力を役職者が持っているものと考えられている。⁽³¹⁾

この行事をはじめとして、多くの行事は役職者を中心として行なわれているのであり、一般のクリシタンは参加しないものが多いのである。しかし、日曜は仕事をしないことになっていて、下肥や針仕事は嫌われたのである。これは五島のクリシタンと同様である。年の暮の日曜には、ドメイゴ祝いとも呼ぶ、マヤ追いこみをやった。紙で十字形のを切つて、馬や牛に食わせるのである。ご誕生も、冬至の前の日曜があてられるので、カトリックのように、

日が決つてはいない。このように、日曜日は重視されてきたのであり、一般のキリシタンが、仕事を休むのは、五島列島の場合と同様なのである。これに対して、役職者は、はるかに多くの機会に、仕事を休んで、役目を果たする必要がある。

ことに、「授け役」は洗礼を施すので、心身を清浄に保たなければならないのである。堺目では、水授けは霜月と二月に行なわれる。一週間前に依頼があると、それ以後は、授け役（おじいさんと呼ばれる）は牛を使ったり、肥桶を扱うことができなくなるのである。⁽³²⁾ 沓部ではお授けの朝まで、一週間水をかぶり、身体をふかずに着物を着た。また、穢れるとされて、下着もつけなかったのである。⁽³³⁾ 授け役は、日常生活でも、諸種の禁忌が課せられた。堺目では、次のようなことが守られた。① 大小便をかけられる恐れがあるので、孫を背負ったり、からかったりしてはならない。また、おしめに直接手を触れてはならず、竹で扱う。② 物のほしてある竹竿の下をくぐってはいけない。③ 鶏卵は尻から出たもので不浄とされ、ねぎは直接に肥をかけるから不浄と考えられ、ともに食べてはならない。⁽³⁴⁾ これらの禁忌が、日常生活の中で守られるのである。また、授けをする前の数日間には性的関係も厳禁されるのである。外出の際は、授け役は必ず杖をついて歩く。これが授け役の象徴と考えられているのであり、キリシタンは道を譲るものとされていたのである。また、授け役は格式があつて、人の後ろを通ることもできないし、人の下にも座れないのである。このように、授け役には、種々の禁忌が課せられていたが、その中心になっているのは、下肥・牛といった、人間の排せつ物に関する穢れを避けることにあつたと言ふことができるのである。また、授けに際しては、これらの禁忌が強化されて、水をかぶって身を潔める必要があり、自分の下着さえもつけられないのである。女性に触れることは、また、この地方でも、授けなどの役目に際しては厳禁されるのであり、穢れとされていた。以上

の授け役についての禁忌及び穢れの観念は、五島列島のキリシタンと同様である。しかし、五島列島では、役職者以外のダキオヤも、穢れを去る必要があるので、さらに厳しいものであったと言えよう。役職者の禁忌については、むしろ、生月の場合の方が嚴重ではある。ここでは、授け役についてのみ述べたのであるが、次に、その他のつもとをあずかる御番役や、御弟子も含めた、役職者全体について、諸種の行事や伝承の中から、とり上げてみよう。

正月四日と三月四日の二回、ゴジンキンと称する行事が行なわれた。現在は正月四日のみ一回だけ行なわれている。これは、役職者が、各信者の家を廻って、ヤバライをするのである。十字の形に紙を切ったお守り、オカミサマ（御神体）、サンジュワン様の水、オテンペンシャと呼ぶ麻で四六本の縄を編んだものを持って、各家に行き、ヤバライをする。お守りは家族の分だけ渡し、病氣などに飲むのである。御番役は、オカミサマを箱に入れて抱く、またサンジュワン様の水を持つ。このために、水をかぶって身を潔める必要がある。各家では、山のもの、海のものなどを料理して待っていたのである。このように、ゴジンキンの際には、水をかぶって身を潔めるのである。神聖なものを抱くのであり、日常生活とは異なったものとして考えられていたのである。

正月二日には、餅ならしと称する行事が行なわれた。信者の家から、鏡餅が一つずつ、役職者（御番役）の家に集められる。サンジュワン様の水を箸でつける。これをみ弟子が持って帰って、各戸に配るのである。各家では、これを保存しておいて、病氣の時などに焼いて食べるのである。これは、サンジュワン様の水で餅を、神聖なものにするという意識が働いていたと言えよう。サンジュワン様の水とは、生月島と平戸の間に浮んでいる中江ノ島という小さな島の生月島に面する岩棚の中腹から、水が湧いているのであり、これを持ち帰って、保存しておいて、儀式の際に使用するのである。中江ノ島は殉教者の島とされていて、殉教者が殺された神聖な場所から、このサンジュワンの水

が湧いてくると信じられているのである。この水が、授けやゴジンキン、餅ならしなどに使用されるのである。

この水を汲むには、できるだけ新造の船で行ったのであり、新造船ができるとその船で出かけて行って、汲んできたのである。何年たっても、この水は変わらないと信じられている。岩の間から、ほんの少しずつしか出ていないが、これをびんで受けてくるのである。女性が行くときの水の出が悪くなると信じられているし、また、船を潔めに行くときには、少なくとも、三日前から水をかぶって身を潔め、その間、女の人に触れてはならないとされていたのである。

サンジュワン様の水を汲むために、水をかぶって身を潔め、女性に触れないという禁忌が守られたのである。したがって、やはり、日常生活の穢れを断つことが要求されていたのである。サンジュワン様の水は、納戸神同様（納戸神とともに納められていることが多いのであるが）神聖なものとされていたのであり、それに接するための禁忌が守られていたのである。

ところで、納戸神に接する場合にも、ゴジンキンに見るように、穢れを潔める必要があったのであり、赤不浄（産・月経）、黒不浄（死）の場合の処置を見てみよう。納戸神が世襲で保持されてきた増山隼吉家の場合には、牛の産の時に二三日間は供え物を納戸神にしなかったのであるが、他に祀っている大神宮やお大師様も避けるのであるから、特別に意識されなかったのである。また、黒不浄（死）は嫌われないというので、これも、さして強く意識されてはいない。またみ弟子になる場合には、お産の場合は遠慮するが、月のものは言わないとされるので、これも祭の当屋などとはほとんど変らないのである。

したがって、生月のキシタンにとっては、穢れとは日常生活の中で、身から出る下肥などが中心であって、産や死についての強い穢れは意識されないものである。生月キシタンの場合、五島のキシタンと同様の要素があるが、

むしろ、役職者に比重が置かれていることに特徴があり、これは、ゴジンキン、餅ならし等に見られる、役職者の活動の職業化の傾向から出てくるものではないだろうか。生月では、神官・僧侶・民間宗教者としてのホーニン等の宗教活動があり、その中に、キリシタンも位置づけられるのである。したがって、宗教家同様の期待が寄せられたと見ることができるのである。

(5) キリシタンにおける穢れ

キリシタンの穢れの観念は、日常生活における、肥灰の使用といった部分についての否定という形態で表現されている。生月キリシタンの例で見たように、出産や死の穢れという点は、さして強調されないし、日本の民間信仰一般よりも弱い意識しか有しないようである。すなわち、日常生活を穢れたものとすることで、日常生活を穢すであろう、出産や死さえも、無視するのである。もちろん、出産や死は、キリシタンの儀礼の中で、最も重要なものなのであって、これをキリシタンの役職者が否定的に扱うことはできない。したがって、より神聖な存在の前で、日常生活の穢れと同列視されてしまうのではないだろうか。授けこそがキリシタンをキリシタンたらしめるものであり、その故に、授け役は精進潔斎を要求されるのである。キリシタンの役職者は、授けを受ける者や、その肉親達に代って、精進潔斎にあたるのではないだろうか。日本では、精進潔斎後の清浄さを説明する妥当な言葉がない。清浄さを犯された状態としての穢れという言葉が全てを表現しているようである。この穢れという状況が、前述のように、日常生活のレベル（俗）と、より明確な、穢れのレベルとの二種類に分けることができる。キリシタンにおいては「俗」のレベルこそが、穢れた状態として理解されたのである。

註

- (1) 筆者昭和五三年八月調査、近日中に報告書が刊行される予定である。
- (2) 『鹿塩の民俗』昭和四八年三月 大鹿村教育委員会 五〇頁
- (3) 桜井徳太郎「結果の原点―民俗学から追求した小地域共同体構成のバラダイム―」(鶴見、市井編『思想の冒険 社会と変化の新しいパラダイム』一九七四年八月 筑摩書房)
- (4) 隠れキリシタンは、生月島・平戸を中心に分布する集団と、西彼杵半島・五島列島に分布する集団に分けて理解することができる。
- 拙稿「隠れキリシタン・隠れ念仏」桜井徳太郎編『日本民俗学講座3 信仰伝承』朝倉書店 昭和五一年九月
- (5) 片岡弥吉『かくれキリシタン―歴史と民俗―』昭和四二年六月 日本放送出版協会、一九九一・二〇〇頁
- (6) 橋口勇八氏(七七歳)談
 ターカイの一形態として、芋作りの仕直しと称するお届けがある。
 下界増太郎右リドンノ帳内下カイデハナニガシナンニンセンハズノ日ニシツケヲ、イタシマシテ、ツミトガラ、オカシマシテ、アナタオンミジョースサマノ、オウケノゴイコーゴイセイヲ、モチマシテ、ツミトガラ、オンユルシ下サレマスルヨートガノオコトハリ、ゴターカイノ、オントドケノオミキノオンハツヲ、ナマクサケモツギソエマシテ、オントリツギハ、コンニチ、ゴトーバンサマノ、オントリツギヲモチマシテ、……後略……
- (7) 〔隠れキリシタンのオラシヨ〕(『日本庶民生活史料集成 第十八巻 民間宗教』一九七二年三月 三一書房)
- 奈留島永道の道脇増太郎による、お届けである。
- (5) 参照
- (8) 奈留町住松山房吉(七四歳)談
- (9) 奈留町矢神 田中文吉(明治三三年生)、田中紋蔵(明治三三年生)談
- (10) (9) 参照
- (11) 福江市観音平 平田栄五郎(七十二歳)談
- (12) 福江市宮原 宮本清造(八二歳)談

(13) 同(12) 参照

(14) (9) 参照

(15) (6) 参照

(16) 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』昭和二年一月 日本学術振興会 二二一～二二三頁

(17) 同田北前掲書 二二一頁

(18) 井之口章次『日本の俗信』昭和五〇年二月 弘文堂 五三～七六頁参照

河童、蛇などの伝説や昔話の中にも、金物を嫌うテーマが繰り返して使われてきた。妖怪等が神的な存在でもあり、神的な存在との交渉の断絶を惹起するのが金物であった。

(19) ちなみに、山仕事や畑仕事まで完全に否定されてはいないのであって、安息日だけで説明することはできない。

(20) 古野清人『隠れキリシタン』昭和三四年一月 至文堂 二二九～二三〇頁

(21) このため、役職者は労働の期日が制限されるので、役職者になりたがらず、隠れキリシタンが衰退していく原因ともなっている。

(22) (6) 参照

(23) (6) 参照九三四～九三五頁

(24) 同前掲書 九六一頁

(25) 田北(16) 二二七～二三〇頁参照

(26) (11) 参照、また

拙稿「隠れキリシタンの『天地始之事』」(『東京立正女子短期大学紀要』第六卷) 参照

(27) 死んで生まれた子にも、サズケを行なっている。これはカトリックとも異なる。名前はコツテとつけるのである。

(28) 福江市宮原 宮本清造(八二歳) 談

(29) (11) 参照

(30) 古野清人『隠れキリシタン』昭和三四年一月 至文堂 一二四～五頁

(31) 生月町老部 増山隼吉(明四一年生) 談 以下は、主として増山氏による。

(32) 古野前掲書 一二六～一三〇頁

(33) (31) 参照

(34) 古野前掲書

* 本研究は、昭和五三年度私学研修福祉会在校研修（特殊研究）の研究助成金を受けて行なった、調査研究の成果である。ここに記して感謝したい。現地調査にあたっては、各地教育委員会及び故老のお世話になった。ことに、五島高校教諭森田豊彦先生、立正大学地理学科林利則氏、生月町教育委員会白石氏には、話者の選定紹介等お世話いただいた。今後の研究で感謝の意を表するつもりである。

論文執筆者

教 助 講 師 講 師	授 教 授 師 師 師 師	井 深 紙 佐 山 杉	口 沢 谷 藤 田 本	美 俊 威 秀 田 津 豐	登 俊 威 秀 津 豐	利 雄 広 一 子 久
----------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------

編集委員

委 副 委 委 委	員 員 員 員 員	長 長 員 員 員	教 授 講 師 講 師	授 授 師 師 師	近 中 紙 佐	藤 尾 谷 藤	久 美 子 堯 広 一
-----------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	------------------	------------------	----------------------------

東京立正女子短期大学紀要 第7巻

昭和54年3月20日 印刷

昭和54年3月24日 発行

編集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会

印刷所 株式会社 第一印刷所

〒104 東京都中央区湊2-2-4

TEL 03 (551) 3061 (代)

発行所 東京立正女子短期大学

〒166 東京都杉並区堀ノ内2-41-15

TEL 03 (313) 5101~3

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

No. 7

March, 1979

CONTENTS

Usages of Punctuation Points in Teaching English (2).....M. Iguchi...(1)	
Pidgin English	
—Its Origin and Features	T. Sugimoto...(20)
On <i>Of Mice and Men</i>	T. Fukazawa...(38)
On <i>Pantaloon in Black</i>	S. Sato...(45)
D. H. Lawrence and Apocalypse	
or His Dualism of Nature	T. Yamada...(76)
Impurity of <i>Kakure-Kirishitan</i> ,	
Secret Christians in Japan	T. Kamiya...(96)

Published by
Tokyo Risscho Junior College For Women

TOKYO JAPAN